
海賊戦隊ゴーカイジャー 仮面ライダーオーズ リバース・オブ・ブラッククロス

バディムの人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海賊戦隊ゴーカイジャー 仮面ライダーオーズ リバース・オブ・ブラッククロス

【Nコード】

N2845V

【作者名】

バディムの人

【あらすじ】

34のスーパー戦隊の力を受け継ぐ海賊戦隊ゴーカイジャー。800年前に封印されたメダルの力を手にした仮面ライダーオーズ。

決して出会わずのなかった二つの力が出会ったとき、恐るべき敵が姿を見せる。

蘇りし悪を、新たな正義が打ち砕く。

黒の終わり そして始まり（前書き）

皆さんこんにちわ。 作者のバディムの人です。

この小説は海賊戦隊ゴーカイジャーと仮面ライダーオーズのクロスオーバー作品です。

ご存知の方もいると思いますが、モバイレッツには仮面ライダーオーズの音声が入っています。このことからゴーカイジャーとオーズの共演を期待された方も少なくないでしょう。ですが、オーズはもう終盤戦。共演はもうないでしょう。あるとすればフォーゼとでしょうか。

そういうわけでこの小説を書いたわけです。皆さんが楽しんでくだされば幸いです。

最後に少しお願いがあります。ぜひ最後まで読んでください。

黒の終わり そして始まり

「完成！名付けて、ゴレンゴークイオー！」

スーパー戦隊を倒すために蘇った邪悪な黒十字王。その正体である黒十字城とスーパー戦隊の戦いはいよいよ大詰めとなった。既に黒十字城を守る悪の戦士達はスーパー戦隊ロボ軍団に倒された。残るは黒十字城のみ。

スーパー戦隊最初の戦隊であるゴレンジャーのマシン、バリブルーン。新たなスーパー戦隊、ゴークイジャーのロボであるゴークイオーの背中にバリブルーンが合体した。

これがゴレンジャーの大いなる力、ゴレンゴークイオーだ。

「頼んだぞ、ゴークイジャー！」

スーパー戦隊の一人、ゴセイレッドがゴークイジャーに信頼の言葉を送る。

人々の夢と希望を背負い、五色の煙をあげながらゴレンゴークイオーは空を舞う。黒十字城の上空にゴレンゴークイオーは到着した。

「ゴークイハリケーンカシオペア……！」

巨大化した二振りのゴークイケンを一つに重ね、黒十字城に振り下ろす。ゴークイケンに赤、青、黄色、緑、桃色の星の輝きが重なる。カシオペア。それは黒十字王のもととなった黒十字総統が唯一弱点としたもの。天に輝く五つの輝きを黒十字総統は苦手とした。それ

は黒十字城も変わらない。カシオペアの輝きを宿したゴーカイケン
は巨大な黒十字城を切り裂いていく。

「こ、こんなバカな！？スーパー戦隊への恨みで蘇った私が何故…
…」

黒十字城は叫ぶがもはや命運は決した。ゴレンゴーカイオーに切り
裂かれた黒十字城は爆発していく。

「積年の恨みで蘇ったこの私が何故、何故だああああああああ
あああああ！！？」

断末魔の叫びを上げ、黒十字城は爆散した。彼の敗因はスーパー戦
隊の力、それを信じる人々の力を甘く見たことだ。信じる心がどれ
ほどの強さになるか、それを彼は知らなかった。

「ありがとう、ゴーカイジャー！！ありがとう、ゴセイジャー！！」

人々がスーパー戦隊を称える声を送る。ゴーカイジャーは見事黒十
字城を倒したのだ。

これがゴーカイジャーとゴセイジャーの激突から始まった黒十字王
との戦いの結末だった。ゴセイジャーはレンジャーキーをゴーカイ
ジャーに返還。ゴーカイジャーに地球の平和を託すことにした。

この黒十字王の事件から数日が過ぎた。ゴーカイジャーには新たな
仲間、ゴーカイシルバーが加わった。彼とともに今日もゴーカイジ
ャーはお宝探しをしている。

だが、彼らを狙う新たな悪の戦士が地球に向かっていった。その事を

知るものは誰もいない。

「あれが地球か……噂に聞いていたが、中々美しい星だ……」

そのものは宇宙船から地球を見ていた。地球。スーパー戦隊が守ってきた青く美しい星。

「コレクションにできないことが残念で仕方ない……」

彼の隣にある箱から大量の鍵が飛び出す。その鍵のどれもが人形と鍵が一体となったものだ。それはゴーカイジャーが変身に用いるレンジャーキーとよく似ていた。だが、人形の形はとも戦隊とは思えないものだ。角を生やした狼や銀色のロボット、様々なデザインがある。どちらかというとスーパー戦隊が戦った怪人達に近いものがあつた。

「ああ、わかっているさ。復讐の時だ……赤き海賊団よ……」

宇宙船は地球に向かい加速する。既に宇宙船の中の者には見えていた。自分が倒すべきスーパー戦隊の姿が……。

地球……この青く美しい星は様々な悪に狙われた。その悪から地球を守ってきた戦士達がいた。

一つ！

五色の戦士達で構成されたスーパー戦隊！

2つ！

悲しみを仮面に隠して戦う仮面ライダー！

そして3つ！

今、彼らの力と意思を受け継ぐ戦士がいた！

34のスーパー戦隊の力を受け継ぐとんでもないやつら！海賊戦隊
ゴーカイジャー！

欲望より生まれた21のメダルを持つメダルの戦士！仮面ライ
ダーオーズ！

決して出会わなかったはずの2つの力が出会う時、最大の戦いが始
まる。

海賊戦隊ゴーカイジャー

仮面ライダーオーズ

リバーズ・オブ・ブラッククロス

黒の終わり そして始まり（後書き）

皆さんいかがでしたでしょうか。今回はオーズは出てきませんでしたが、次は登場いたします。お楽しみにしてください。

お願いの件ですが、オーズの大いなる力を募集します。もちろん私も考えていますが、少しむちゃくちゃなもので、できれば巨大戦で使えるものをお願いします。

気に入ったものがありましたら採用いたします。

バースの大いなる力も募集しています。豪獣神が使う予定です。ですが、ドリルやレックスに対応したもので構いません。

感想やメッセージでお送りください。期限は8月末まで。皆さんのアイデア、楽しみにしています。

メダルの王様（前書き）

今回はお宝探しのシーンです。

この小説の時系列はゴークカイジャー第21話（ボウケンジャー回）以降。オーズは36話（ウヴァバラバラ回）以降となっています。まあ、本編にはつながらない展開になっています。

メダルの王様

地球の青い空を赤い船が駆ける。その名もゴーカイガレオン。宇宙から来た海賊戦隊の拠点である。

その中に6人の若者と一匹の鳥がいた。彼らがスーパー戦隊の力を受け継ぐ35番目の戦隊。海賊戦隊ゴーカイジャーである。

地球にある宇宙最大の宝を手に入れることを夢見る船長のキャプテンマーベラス。又の名をゴーカイレッド。宇宙帝国ザンギャックから脱走した海賊のNo.2、ジョー・ギブケン。又の名をゴーカイブルー。

お金が大好きな活発な女海賊、ルカ・ミルフィ。又の名をゴーカイイエロー。

頭脳明晰な慎重派、ドン・ドッゴイヤー。あだ名はハカセ。又の名をゴーカイグリーン。

ザンギャックに滅ぼされたファミーユ星の元王女、アイム・ド・ファミーユ。又の名をゴーカイピンク。スーパー戦隊の一人、アバレキラーより力を託された戦隊オタク。海賊戦隊唯一の地球人。その名も伊狩鎧。又の名をゴーカイシルバー。

彼ら6人が海賊戦隊ゴーカイジャーだ。

そして彼らの仲間、オウム型ロボットのナビィ。

お宝探しにいらぬはならない海賊戦隊のマスコットだ。

「レッツお宝ナビゲート!」

早速ナビィが占いを始めた。目を様々な色に変えながら、部屋を飛び回る。

ナビィはこの間、一種の瞑想状態に突入する。様々なイメージがナビィの頭に入ってくる。

今日はメダルだ。メダルの雨がナビィ目掛けて降ってくる。ナビィはそれをかわそうとした。だが、余りに広範囲に振るメダルの前ではそれは無駄な努力であった。

ナビィにメダルがどんどん落ちてくる。ナビィは逃げられない。余りの重さにナビィは助けを求めたが、誰もこない。ナビィの心が絶望に沈みかけた。その時！

現実のナビィは天井にぶつかった！この瞬間、ナビィの中で曖昧だった宝のイメージが固まる！

「メダル〜メダル〜メダルを探せ〜」

ナビィが今回のお宝に通じるキーワードを出した。今回はメダルだ。

なお、ナビィは瞑想状態の間にあった嫌なことは瞑想が終わると完全に忘れることができる。だから、嫌なイメージを見たことに気づくことはない。

「メダル？メダルに関係する戦隊なんていたっけ？」

ハカセは鎧が作ってくれたスーパー戦隊大百科を見る。メダルに係がありそうな戦隊はいそうにない。

「鎧、何か知らない？」

ル力はスーパー戦隊に詳しい知識を持つ鎧に聞いてみた。鎧は何か思い出せそうな気がした。

「メダル……メダル……どこかで聞いたことがある気が……」

だが、中々出てこない。

「とにかくメダルを探せばいいんだな」

「うんうん」

「じゃあ、行くぞ！」

マーベラスの指示を受け、皆は地上に降りることにした。

とにかくメダル。メダルである。今回はメダルが大いなる力に繋が
る。

マーベラスたちはメダルを探した。だが、地球にあるメダルはオリ
ンピック優勝者の証や何かの勲章としてもらえるもの。オリンピッ
クは今年は無し。とてもではないがオリンピックは関係無さそうだ。
ゲームセンターのメダルを使ったゲームなのではないかと、ゲーム
に挑戦してみた。実際にプレイしたのは勝負事に強いルカとジョー、
そしてなぜか自信満々のマーベラスであった。

その結果は……

「マーベラスさん、元気出してください」

アイムがマーベラスを心配する。

マーベラスは全然駄目だった。ジョーとルカはものすごいスピード
でメダルを稼いだが、マーベラスは早々にプレイするためのメダル

を使いきった。ルカとジョーが分けようとしたが、マーベラスは拒否した。

「仲間にメダルを恵んでもらってまでプレイしたくねえ」

マーベラスのプライドが許さなかったのだ。仲間にメダルを恵んでもらってゲームをするような真似は……

「だからマーベラスはやめといたほうがいいって言ったのに……」

マーベラスのゲームの弱さは仲間内の誰もが知っている。ポーカーをやればマーベラスはいつも最下位だ。なのにマーベラスは自信を失わず、ワンペアを出す。ワンペアは大して強い役ではないのに。

「でも、ゲームセンターでも怪しいやつはいなかったね」

「そうだな」

ジョーとルカはゲームをしながら周りへの注意も怠らなかった。だが、スーパージョー戦隊らしき人物はいなかった。

「メダル……メダル……」

「まだ悩んでるのか」

「ええ。なんか出そうな気がするんですけど……」

鎧はまだ悩んでいた。何か出そうだが出てこない。後一つ何かあれば思い出せそうな気がするのだが……

「あまり悩みすぎるのもよくありませんよ、鎧さん。それでも飲んで落ち着いてはどうでしょう」

アイムが缶ジュースを渡してきた。

「ありがとうございます」

鎧は受け取り、早速缶を開けようとした。
そこで気づいた。

「缶……缶……メダル……ああ！」
「どうした」

突然鎧が大声をだしたので皆驚いた。

「思い出しました。メダルとくればメダルオーですよ！」
「メダルオー？」

聞いたことのない名前だ。皆は思わずオウム返ししてしまった。

「はい、メダルオーって言うのは」

鎧が話始めた背後で爆発音が起こった。

「何！？」

「とにかく行くぞ！」

マーベラスは自分がもらった缶ジュースを一気に飲み干し、走り出す。

「皆さん、缶の一気に飲みは駄目ですよ。お腹が冷えます」
「誰に言ってるんだ、行くぞ」

鎧の発言にジョーが突っ込む。皆もマーベラスとともに走る。

「グオオオ!!」

街ではパンサーとゴリラを繋げたような不気味な怪物が暴れていた。

「何あの半分こ怪人!？」

ルカがその異形に驚く。

「ザンギャックの行動隊長でしょうか」

「でもゴーミン連れてないよ」

行動隊長は兵士であるゴーミンやスゴーミンを連れているものだ。
この怪物は一匹で暴れている。行動隊長とは何か違う……。

「とにかく倒すぞ」

6人は人形がついた鍵、レンジャーキー。携帯を大型化したような機械、モバイレーツとゴーカイセルラーを取り出す。

「豪快……」

6人が変身しようとした時、4人の男性が走ってきた。

「アंक、メダルを！」

「うけとれ！」

赤い怪物のような右手を持つ青年がメダルを投げる。

人の良さそうな青年はそれを受けとると、ベルトの穴にメダルを差し込む。

「あれは……」

ナビイはメダルを探すように言っていた。まさかあれがナビイの言っていたメダルなのか。

髭を生やしたワイルドな男性もメダルを取り出し、指で弾く。

「後藤ちゃん、援護は任せたぜ」

「はい」

男性の後ろにいた真面目そうな青年が答えた。

男性が弾いたメダルは男性が腰に巻いたベルトに入る。

人の良さそうな青年はベルトの右側にある円盤、オースキャナーをベルトの上に走らせる。

男性はベルトについたハンドルを回した。

「変身！！」

『タカ・トラ・バッタ！タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ！！』

ベルトから歌が響き、人の良さそうな青年の姿が変わる。胸には三種の動物のシンボルが書かれたサークル。頭は赤い羽で彩られた緑の目の仮面。黄色い爪のついた腕。緑の脚。

青年は仮面の戦士に変身した。

男性のほうはエネルギーフィールドのようなもので包まれた。その中で男性の体を機械のスーツが覆う。U字型のバイザーが赤く輝くとともにエネルギーフィールドは解除された。

男性はロボットのような戦士に変身した。
それを見た鎧が叫ぶ。

「あれです！あれがメダルオーです」
「だからメダルオーってなんだ」

マーベラスは先ほどからその妙な名前が気になっていた。

「メダルオーは新しい仮面ライダーのことですよ」
「仮面ライダーってなんだ」

聞いたことが無い名前だ。嫌、そもそも……

「待てよ……スーパー戦隊じゃないのか？」

鎧がメダルオーと呼んだ戦士を見てみる。鎧が指したのは三種の動物のサークルを持つほうだ。

スーパー戦隊のスーツとはずいぶんデザインが違う姿。おまけにスーパー戦隊はレジェンド大戦の影響により変身できない。なら、彼らはスーパー戦隊ではない。

「どういうことだ……」
「ナビイが占いを外したのか？」
「嫌、そんなはずは……」

ナビイの占いは今まで一度も外れたことがない。必ず大いなる力に繋がっていた。なら、今回はオーズから力をもらえるはず。

「おい、お前達！」

後藤と呼ばれた青年がマーベラス達のところに来た。

「ここは危険だ。早く安全な場所に行け！」

「おい、あれはスーパー戦隊じゃないのか？」

マーベラスは後藤に質問した。律義に後藤は答えてくれた。

「あれはオーズとバースだ。スーパー戦隊じゃない」

「やっぱり違うみたいだね」

「どうすんの、マーベラス」

スーパー戦隊ではないと聞いてルカやハカセは迷っているようだ。

「ここは仮面ライダーと一緒に戦いましょう」

「仮面ライダーじゃないだろ」

鎧は戦う気満々のようだ。ジョーはオーズとバースを仮面ライダーと呼ぶ鎧に突っ込んだ。

「火野！」

後藤が叫ぶ。オーズとバースの前に新たな三人の怪人が現れ、2人に襲いかかっていた。四対二。数に差ができ、不利となった。

「仕方ない、手を貸してやるか」

今度こそマーベラスはレンジャーキーをモバイレッツに差し込んだ。

鎧は人形のまま、ゴーカイセルラーにレンジャーキーを入れる。

「お前ら、まさか……」

「豪快チェンジ！」

モバイレーツとゴークアイセルラーから放たれた光が6人の体にスーッと装着される。

海賊風のスーツを纏った6人の戦士が現れた。

「派手に行くぜ！」

ゴークアイレッドとなったマーベラスを先頭に6人は戦場に走る。

「あいつら、海賊戦隊だったのか」

6人の正体を知った後藤もバースの援護に走る。

メダルの王様（後書き）

ナビィのお宝ナビゲートの描写はカーレンジャー回で思いつきました。今日の放送では人助けでしたね。きっとナビィもマーベラスさんみたいに大変なイメージを見たと思います。人助けも楽じゃないです。

前書きにも書きましたが、ウヴァさんは出ません。メダルになってごろごろ転がっています。次回はゴークカイジャーとヤミーが戦います。

海賊と五星と奪われた力（前書き）

今回はゴークカイジャーがグリードと戦います。

カウントザメダル！現在オーズの持つメダルは

タカ×2 クジャク×1 バッタ×1 トラ×1 チーター×1 シャチ×1

ウナギ×1 サイ×1 ゴリラ×1 ゾウ×1 プテラ×2 トリケラ×1 テ

イラノ×2

海賊と五星と奪われた力

オーズに変身した火野映司は苦戦を強いられていた。2つの異なる特性の生物の特徴を持つ合成ヤミー。これだけでも厄介だが、さらに3体のグリードが襲ってきた。青い女性のようなグリードはメズール。黄色のネコを思わせるグリードはカザリ。銀色の重量級グリードであるガメル。だが、映司は一つ疑念があった。

「メズール、ガメル！カザリと手を組んだのか！？」

映司の記憶ではメズールとガメルを蘇らせたウヴァはカザリと戦っていた。ウヴァがカザリと手を結んだのか？だが、メズールの答えは予想と違った。

「ええ、あなたを倒すためにね」

「ウヴァは？」

「ああ、彼はバラバラにしたわ」

「なんだって！」

自分達を蘇らせたウヴァをバラバラにした。その事実映司が驚く。

「そんなに驚くことでもないわ。ウヴァは私を裏切った。アंकと同じように」

「ウヴァが裏切った？」

「ええ。裏切りには相応の報いがくる。あなたも気をつけることね。アंकに裏切られないように」

メズールは水流を映司に放つ。避けきれず流されてしまう。

「うあー！」

「最も、その調子では私たちに倒される心配をするべきね」

パンサーとゴリラの合成ヤミーであるパンサーゴリラヤミー。彼も映司に右側のパンサーの手に持つ爪で襲いかかる。

「くっ！」

数ではこちらが不利。数の差を埋めるにはあの力を使うしかない。映司は紫のメダルを呼ぼうとした。それに気づいたバースに変身した伊達が叫ぶ。

「やめる火野！紫のコンボは危険だ！」

「よそ見してる場合？」

カザリの爪、ガメルの拳がバースを襲う。

「伊達さん！やっぱり……」

映司は紫のメダルを取りだそうとする。

そのとき、銃声が響いた。カザリとガメルを銃弾が襲う。

「なんだい？」

「痛いー」

銃を撃ったのはゴークイジャーだ。

「俺たちも混ぜてもらおうか」

「何かしら、あなたたち」

グリードはゴークイジャーのことを知らないようだ。メダル以外に興味を持たないからだろうか。

だが、映司と伊達は知っていた。自分たちを守ってくれたスーパー戦隊の力を受け継ぐ存在を。

「もしかしてゴークイジャーですか」

「あの海賊の……」

「そのゴークイジャーだ」

マーベラスはうなずく。映司は喜んだ。

「こんなところでゴークイジャーの皆さんに会えるなんて……あつ

！俺、今こんなんですけど怪人じゃないです」

「わかってます」

「見てたからな」

映司は怪人と間違えられて攻撃されるのではないかと心配した。だが、ゴークイジャーは映司が変身した瞬間を見ているからいらぬ心配だった。

「ところであんた達が来たってことは……お宝が近くにあるのか」

ゴークイジャーは宝を探していると伊達は聞いていた。宝があるのではないかと周りを見回す。

「嫌、あんた達もっているらしいわよ」

「お宝に繋がる大いなる力をね」

「大いなる力？」

伊達と映司は顔を合わせる。そんなの持った覚えはない。自分たちが持っているのはベルトとメダルだけだ。

「ちょっとわかりません」

「そうなのですか」

「何かあるはずなんだが……」

ゴーカイジャーとオーズ達は悩みはじめた。
グリードのことを忘れて。

忘れられたグリード達はしばらく黙って様子を見ていた。

「ねえ、カザリ。そろそろ声かけたほうがいいんじゃない」

「そうだね」

カザリはゴーカイジャーの方を向く。

「話し合いは終わったかい」

「おっと、待たせたな」

皆は再び戦いの構えに入った。

「なんだがわからないけど……まとめて倒させてもらおうよ」
「こっちのセリフだ。行くぞ！」

オーズ側が大きく増え8対4の戦いとなった。

マーベラスと映司はパンサーゴリラヤミー。
ルカとアームはカザリ。

ジョーとハカセはメズール。伊達と鎧はガメルと戦闘を始めた。

「もらった！」

マーベラスはゴーカイサーベルを振るうが、パンサーゴリラヤミーはパンサーの右腕でサーベルをつかむ。逆に左側のゴリラの拳でマーベラスを殴り飛ばす。

「レッドさん！この！」

映司はトラクローを展開して挑む。だが、パンサーゴリラヤミーは素早い。トラクローを爪で受けとめ、逆に殴り飛ばす。

「大丈夫か」

「はい、レッドさん」

「マーベラスだ」

「火野映司って言います」

「そうか。だが、自己紹介は後だ」

二人は武器を構え、パンサーゴリラヤミーを見る。

「あいつの爪、厄介だな」

「しかもパワーもあります」

「（他の連中は……）」

マーベラスは周りの様子を見た。

ジョーとハカセはメズールの足技に翻弄され、水流で流される。

アイムとルカはカザリのスピードを抑えているが、優勢ではない。カザリの爪による反撃を受けている。

鎧と伊達はガメルの突進で弾かれていた。

このピンチを脱するにはあの力を使っしかない。スーパー戦隊より託されし鍵の力を。

「お前ら、ゴークイチェンジだ！」

「じゃあ、ダイレンジャーにしましょう！」

「よし！」

「ゴークイチェンジ！！」

『ダイレンジャー！』

ゴークイジャーは五星戦隊ダイレンジャーに姿を変えた。伝説の生物をもとにした拳法を使う戦隊だ。

「アंक、俺もメダルチェンジだ！」

「なら、これにしろ」

アंकは青いメダルを投げる。映司はそれをベルトに入れ、スキヤンした。

『タカ・ウナギ・バッタ！』

映司の腕が青いウナギアームに変わる。これは肩についた電気ウナギムチを武器として使えるのだ。

「行くぜ、映司！」

「はい」

リュウレンジャーに変身したマーベラスは接近戦を挑む。

パンサーゴリラヤミーの懷に入り、次々に拳や肘を繰り出す。それは竜の炎のように激しく苛烈な攻撃だ。パンサーゴリラヤミーは力任せに腕を振るい、マーベラスを潰そうとする。

だが、その腕がムチに縛られた。映司の電気ウナギムチだ。しかもムチは電気でヤミーを痺れさせた。

「今です、マーベラスさん！」

「よし！天火星・稲妻炎上破！」

マーベラスの腕から炎が放たれる。

ダイレンジャーは皆氣力の使い手であった。天火星を守護星に持つリュウレンジャーは炎と稲妻を操る。それを利用したのがこの稲妻炎上破だ。マーベラスが放った炎は見事パンサーゴリラヤミーを燃やした。

「姿が変わったくらいで！」

メズールは水流を使い、2人を吹き飛ばそうとした。

テンマレンジャーとなったジョー。シシレンジャーとなったハカセはそれをかわす。

「天重星・回転蹴り！」

テンマレンジャー。天馬の力を持つこの戦士は足技を得意とした。ジョーはその能力を活かし、連続で回転蹴りを放ってメズールを蹴り飛ばす。

「くっ、よくも！」

メズールは再び水流でジョーを攻撃しようとする。
だが、突如現れた電車がメズールを襲った。

「きゃあ!？」

「天幻星・霧隠れさ。どうだい？」

電車を出したのはハカセだった。天幻星霧隠れは幻で攻撃する技。
これで電車の幻を出したのだ。

「天重星・重力逆転破！」

メズールの体が大地から浮かび上がる。天重星は重力を操る技。この重力逆転破は相手の周りの重力を操ることができる技だ。浮かび上がったメズールは容赦なく地面に叩きつけられた。

カザリは右の爪、左の爪を交互に繰り出しキリンレンジャーとなったルカを攻撃する。爪を受けたルカは地面を転がる。カザリは更に風を放とうとした。

「天時星・時間返し！」

ルカがそう唱えると時間が巻き戻った。天時星・時間返しは10秒、20秒の間時間を巻き戻す技。

ルカはカザリの爪を食らう前に時間を戻した。
カザリが右の爪を出す。ルカはそれを弾く。続いて出された左の爪も弾かれた。

「何!？」

自分の攻撃が全て弾かれたことにカザリは驚いた。まるで予測されていたかのように。実際はルカが一度食らった攻撃を覚えていたからだが。

腕を弾かれ、隙だらけのカザリにルカはキックをお見舞いする。そのキックでカザリは後ろに下がった。

「今よ、アーム！」

「はい、天風星一文字竜巻！」

天風星は風を操ることができる。アームにより出現した竜巻がカザリの体を切り刻む。

「ぐああ！」

カザリの体からメダルが飛び出す。一際目立つ黄色いメダルを赤い腕が掴んだ。

「ライオンか。黄色のコンボが使えるな」

赤い腕はアंकの体に戻った。

「あんた、一体どんな体してるのよ！」

アंकの腕に驚いたルカが突っ込む。

「今は戦いが先だ。ほら、まだ生きてるぞ」

カザリは立ち上がった。

メダルを奪われたことで怒りをたぎらせていた。

「僕のメダル……返してもらっよ」

「ルカさん、今は……」

「後で教えなさいよ！」

2人は再びカザリとの戦いに挑む。

『ブレストキャノン！』

バースの胸のカプセルから出現したパーツがキャノン砲となり、バースに装着された。

「虎の人、後藤ちゃん！俺がチャージしている間、あいつの注意をそらしてくれ」

「わかりました！でも、これは虎の人じゃなくてキバレンジャーと言いまして……」

「後にしておけ！来るぞ！」

キバレンジャーに変身した鎧は伊達にキバレンジャーについて教えるようにした。だが、後藤の注意を聞いて気を引き締める。まずはキバレンジャーの力を知ってもらう。

「わかりました、白虎真剣！」

柄に虎の顔を持つ剣、白虎真剣。強力な刃がガメルの体を切り裂く。

「よくもやったな！」

ガメルは力任せに鎧を殴ろうとする。隙だらけのガメルに後藤のバ

ースバスターが撃ち込まれた。

「うっ、邪魔するな！」

ガメルは頭から衝撃波を放ち、後藤を攻撃する。後藤は衝撃波の起こした爆発に巻き込まれた。

「うあ！」

「後藤さん！吼新星・乱れやまびこ！」

吼新星・乱れやまびこは様々な音楽を操り、増幅させることで超音波とするキバレンジャーの技である。今、ガメルの耳には絶対間近では聞きたくない激しいロックが響いていた。

「う、うるさい」

ガメルは激しく苦しむ。グリードは五感が弱いため、普通は騒音でも気にならない。だが、耳元で大砲の砲撃を響かされて無視できるほどではなかったようだ。

『セルバースト！』

「よし、チャージ完了！二人ともどいてくれ！」

チャージを終えたバースが現れた。鎧と後藤が戦っている間に六回ほどチャージした。あとはこのエネルギーをぶつけるのみ。

「ブレストキャノン、発射！」

ブレストキャノンから赤いエネルギーが発射される。それは見事にガメルを吹き飛ばした。

「痛い」

「ガメル、大丈夫！」

「ヤミーは……」

グリードが一か所に揃う。

カザリはパンサーゴリラヤミーを見た。

『タカトラバッタ！タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ！』

タトバコンボに戻った映司はオースキャナーをベルトに走らせた。

『スキヤニングチャージ！』

映司は足をバッタの足のような形に変え、空中に飛び立つ。

マーベラスも同じ高さに飛び立った。

「天火星・稲妻蹴り！！」

「せいやああああああ！！」

天火星・稲妻蹴りとは気力を足に集中し、相手に炸裂させる技である。

マーベラスのアレンジによるオリジナル技だ。

オーズは足を突き出して三つのリングをくぐる。その度にオーズの足にエネルギーが満ちていく。

2人は共にキックをパンサーゴリラヤミーの胸板に放った。パンサーゴリラヤミーが派手に吹き飛ば。ダブルキックの威力に耐えられずパンサーゴリラヤミーは爆発した。

「やりましたね」

「おうよ」

2人は顔を合わせる。

マーベラスはゴーカイレッドに戻った。他の5人もゴーカイジャーに戻る。

「後はお前らだ!」

「くっ!」

「一気に決めるぜ!」

ゴーカイジャーはバツクルからレンジャーキーを飛ばす。そして、ゴーカイガンとゴーカイサーベルにセットした。シルバーはゴーカイスピアにキーをセットする。

『ファイナルウェーブ!』

オーズはメダジャリバーを取りだし、セルメダルを3枚装填。刃をオースキャナーでスキャンする。

『トリプル・スキャンングチャージ!』

バースはバースバスターの銃口にメダルポッドを取り付けた。

『セルバースト!』

それぞれの武器にエネルギーが貯まる。

今、8人の必殺技がグリードに放たれようとしていた。

その時だった。映司が紫の光に貫かれたのは。

「じ……これは……」

映司のベルトからコアメダルと光が抜け出した。そのまま、映司は倒れてしまう。

「映司！」

マーベラスが映司のもとに走った。映司を持ちあげ、様子を見る。そしてあることに気づいた。

「なんだ、これは!？」

映司の腰のオーズドライバーは石化していた。

「なんだと!？」

アंकもそれに気づき、駆け寄った。

「バカな!オーズの力が……」

フフフ、フハハハ……

不気味な笑いが周囲に広がる。

「あつ、あれ見て!」

ハカセの指差した方には一人の怪人がいた。青色のズタボロのコートを羽織った亡霊のような怪人だ。肌まで青く、ますます不気味なイメージを強める。頬には一筋の傷があった。

その男の手には三枚のコアメダルがあつた。そして……

「フハハハ……手に入れたぞ。 コアメダルと…… オーズの力を！」

存在しないはずのオーズのレンジャーキーも、その腕の中にあつた

……

海賊と五星と奪われた力（後書き）

皆さんどうだったでしょうか。今回はダイレンジャーにゴーカイチ
エンジンしました。テレビで気力技を使わないのでこちらで使わせて
みました。やはり、電車がまずいのでしょうかね。

では、ご意見ご感想お待ちしています。オーズの大いなる力も募集
してますよ。

黒の後継者（前書き）

今回はライバルキーを使う男が登場します。
それではお楽しみください。

黒の後継者

「お前は……ギムト！」

青い怪人を見てマーベラスが名前を叫ぶ。
ギムトはマーベラスの方を向いた。

「その声……赤い海賊団の一員だな。お前がそれを使っているということはアカレッドが死んだのは本当だったか」

赤き海賊団。かつてマーベラスがいた海賊団だ。マーベラスはそこで船長のアカレッド、バスコ・ダ・ジヨロキアとともにレンジャーキーを集めた。だが、バスコの裏切りによりアカレッドは行方不明となった。残されたレンジャーキー、ゴーカイガレオン、ナビィはマーベラスが預かっている。

「アカレッドは死んじやいない。今も宇宙で生きている」

マーベラスはアカレッドが死んだとは思っていない。必ず宇宙のどこかで生きている。だから、マーベラスにとってレンジャーキーは預かったものなのだ。

「くくく……まあいいか。やつの話をしにきたわけではないからな」
ギムトは地面に降りる。

「おい、あいつ何もんだ！」

アंकが聞いてくる。ジヨーは自分が知っている情報を語った。

「宇宙の大泥棒、ギムト。宇宙の様々な場所を巡り、お宝を集める男だ」

ルカ、ハカセ、アイルムが続ける。

「でも突然話を聞かなくなっちゃったんだよね」

「まさか赤き海賊団と関わっていたなんて……」

「一体どのような関係なのでしょう」

どのような関係でも関係ない。オーズドライバーが石化したのはやつが何かしたからだ。アークはギムトを叩き潰すことを誓った。

「お前こそ死んだんじゃないかったのか、ギムト。アカレッドに宇宙の藻屑にされたはずだ」

「そうだな。君の言う通りだ。私はレンジャーキーを奪おうとしてアカレッドに敗れた。宇宙に流され、私はこのまま息絶えるのではないかと思ったよ。だが、私は闇から力を授かった」

ギムトはその時のことを思い出していた。宇宙最大のお宝。ゴーカイジャーの目標でもあるその宝をギムトも手に入れたいと夢見ていた。それを手に入れる鍵と言われるレンジャーキーの噂を聞き、ギムトはそれを手に入れようとした。レンジャーキーを巡る戦い。その中でギムトはアカレッドに敗れ、宇宙に放り出された。

宇宙は無重力。ギムトに宇宙を自在に移動する力はなかった。ただ流されるままだった。

このままギムトは自らが死ぬのではないかと恐怖した。太陽のような恒星に焼かれ燃え尽きる。または惑星の重力に惹かれ、無抵抗に大気圏の熱にさらされる。あるいは隕石にぶつかって……
気が狂いそうだった。それでも何もできない。

ギムトは何もかも諦めようとした。だが、一方でなんとしても生き延びたい気持ちが強くなった。生き延びて赤き海賊団に復讐する。その時、闇が来た。闇の中でギムトは力を授かったのだ。ギムトはその力で己の思いを実行することにした。赤き海賊団への復讐を。

「闇だと？」

「そうだ。先ほど、オーズの力をレンジャーキーに変えたのも闇からもらったこの武器のおかげだ」

ギムトは黒色の銃を取り出した。このパワーキーガンは、パワーをレンジャーキーの形に変換できるのだ。

「ギムト、お前の目的はなんだ！」

「私の目的……ククク、フハハハ！」

ギムトは笑いだし、告げた。

「私の目的はレンジャーキーとこのコアメダルを手に入れること。そして、お前達を壊滅させることだ！」

ギムトは左手に装備したガトリング砲を出す。即座に発射、マーベラスを蜂の巣にしようとする。

マーベラスは不意打ちにもかかわらず、反応した。側転してかわし、ゴーカイガンで反撃する。

ギムトは右手に持ったサーベルで弾を切り裂く。

「マーベラス、加勢するぞ！」

ジョーがゴーカイサーベルを構え、戦いに加わる。

「さつさと片付けてオーズの大きいなる力をもらうわよ！」

ル力に続き、アイム、ハカセ、鎧も戦列に加わる。

「皆、あいつのところに行ったな。さて、俺はグリードを……」

伊達は気づいた。もう三体ともいない。

「伊達さん。もうグリードはいません」

「言つてよ、後藤ちゃん」「すいません、オーズのベルトが石になったことに驚いて……」

「まあ、俺も人のこと言えないけどさ」

伊達もマーベラスとギムトのやり取りに注目していた。後藤と一緒にだ。

「後藤ちゃんは火野とアंकを頼む。俺はオーズの力を取り返すことにするよ」

「わかりました。気をつけてください。相手は宇宙人です」

「ああ、わかった」

伊達もギムトとの戦いに加わる。

「7対1か……ならば、これを使うとしよう」

ギムトはバックルから取り出した。レンジャーキーに良く似た鍵を。

「レンジャーキー!？」

「レンジャーというよりライバルキーだな」

ギムトはモバイレーツに良く似た黒い機械、モバイクロスを取り出す。

ギムトはモバイクロスにキーを差し、回した。

『狼鬼!』

モバイクロスから音声が響き、ギムトの姿が大きく変わる。狼の顔を持つ一本角の鬼、狼鬼へ。

その姿を見て鎧が驚く。

「狼鬼!?! なんだあいつが……」

「知ってるのか」

「知ってるも何もガオレンジャーの敵、オルグの中でも強力なデュークオルグです」

鎧の返事に驚いたのはハカセだ。

「ええ? なんであいつがそんなやつ力持ってるのさ」

「これも闇からもらった品だ。その力をお見せしよう」

狼鬼と化したギムトは高速で動きまわる。ゴーカイジャーには捉えられないスピードだ。ギムトが横を通る度、ゴーカイジャーのスーツが傷つく。

「くそ!」

「皆さん、ここはガオレンジャーで!」

「因縁の対決ってやつか? 良いぜ!」

ゴーカイジャーはレンジャーキーをモバイレッツとゴーカイセルラーにセットした。

「ゴーカイチェンジ！」

『ガオレンジャー！！』

百獣戦隊ガオレンジャー。地球の精霊、パワーアニマルに選ばれた戦士達だ。それぞれが動物の力を持っている。

「行くぜ！」

ガオレンジャーvs狼鬼。因縁の戦いが再び始まった。

「とう！」

ガオイエローとなったルカが先陣を切る。鷲の力を持つガオイエローは翼を広げ、空から攻撃する。

「イーグルソード！」

「三日月剣！」

ルカは空中からイーグルソードを振りおろす。ギムトは三日月のような剣でそれを受けた。

ルカは直後、空中に離れる。

「はああ！」

続いてガオブルーとなったジョーがシャークカッターを両手に走る。

「サージングチョッパー！」

ガオブルーの必殺技、サージングチョッパー。両手のシャークカッターで相手を左右両側から斬る必殺技だ。

「効かん！」

ギムトはサージングチョッパーを三日月剣で受けとめ、逆に切り返す。

『クレーンアーム！』

伊達の右腕にクレーンが装備される。クレーンを放ち、ギムトに巻きつける。ギムトの手は使えない。

「何！」

「今だ、やれ！」

「バイソンアックス！」

「タイガーバトン！」

「ガオハスラーロッド、ソードモード！」

ガオブラックとなったハカセは黒い斧。ガオホワイトとなったアイムは白いバトン。ガオシルバーとなった鎧は銀色の長剣。それぞれの武器でギムトを攻撃する。

「ぐあ！」

「ガオメインバスター、ファイナルモード！」

マーベラスはライオンの形の砲頭がついた銃を持つ。ライオンの口

から黒い銃口が飛び出す。

「ガオ！」

銃口からエネルギー弾が発射され、ギムトの体を焼き尽くす。

「ぬああ!？」

「なんだ、意外と大したことねえな！」

強敵と聞いていたがずいぶんあつけない。マーベラスはもう勝てる気でいた。

「オーズのキーとコアメダルを返して、ついでにライバルキーとやらを寄越しな！」

「さすがは海賊。根こそぎ奪うつもりか」

「もうお前に勝ち目は無いぜ」

「それは……これを見てから言うのだな！」

先ほどの攻撃でギムトの縛りは解けていた。ギムトは新たなキーを取りだし、モバイクロスに差し込む。

『バイオハンター、シルバ!』

銀色のロボットのような戦士、シルバとなったギムトはホルスターから銃を抜く。銃の名はバイバスター。反バイオ粒子のビームを発射する強力な光線銃だ。それを次々とゴーカイジャーと伊達に撃つ。突然の攻撃にゴーカイジャーと伊達は対応できず、撃たれてしまった。

「ぐああ!!!」

「形成逆転だな、海賊ども」

倒れたマーベラスにギムトはバイバスターを向ける。

「くそ……」

「今、君に止めをさしてもいいが……それは後の楽しみだ」
「なんだとぐあー!」

ギムトはマーベラスの腹を踏む。

そしてそのまま、マーベラス以外のゴーカイジャーを撃つ。

「うああ!」

「てめえ……」

「今度来る時、私は君の仲間を1人1人殺す。そして最後に君を殺すのだ」

ギムトはマーベラスから離れ、マーベラスの足を撃つ。

「くっ!」

「そこでじっとしていたまえ」

ギムトはアंकに足を進める。

「や、ヤバい。後藤ちゃん、あんこを!」

「させるか!」

後藤はバースバスターをギムトに撃つ。ギムトはかわしもせずに近づく。

「そんなものか?ふん」

ギムトはバイバスターでバースバスターを撃つ。バースバスターは壊され、後藤も腕に怪我をする。

「ぐあ！」

「コアメダルを寄越したまえ」

「ふざけんな！」

アंकはロケットパンチよろしく右腕を発射した。ギムトは腕を振り、アंकの腕を壁にぶつける。

「く、くそ」

アंकは悔しかった。こんなやつに何もできずにメダルを奪われるのが悔しくてたまらない。怒りに腕が震える。

ギムトはアंकの体を探り、メダルホルダーを取り出した。中のメダルを見てギムトは満足する。

「今回はここまでしておくよ、残りは次の機会にもらう」

ギムトはそいうと姿を消した。

「ちくしょう！」

仲間を好き放題やられ、コアメダルも奪われた。マーベラスは己の無力が悔しかった。

黒の後継者（後書き）

皆さんいかがでしたでしょうか。

ギムトの使ったキーについての紹介は、近いうちに書くつもりです。
それでは感想をお待ちしています。

キャラ紹介（前書き）

リバース・オブ・ブラッククロスのキャラ紹介です。
大いなるネタバレが入っているので注意してください。
ライバルキーの紹介は随時追加予定です。

8月23日、連続チェンジに出たメンバーを追加。

キャラ紹介

ギムト

宇宙をかける大泥棒。

レンジャーキーを巡ってアカレッドと対決し敗北。 宇宙を漂流していたところを“闇”に救われる。 宇宙を漂流し

与えられたライバルキーの力で、ゴーカイジャーを抹殺しようとしている。

あらゆるお宝に目が無く、宇宙最大の宝を狙っている。ライバルキーの力で、最終的には全宇宙の宝を手にいれるつもりである。

武器はサーベルと左手にとりつけたガトリングガン。

イメージCVは藤原啓治。クレヨンしんちゃんのしんのすけの父や、ケロロ軍曹のナレーションを担当している。特撮出演経験は無し。少々意外な気がしなくもない。

モバイクロス

モバイレーツに極似した機械。黄色い目を持つ黒十字のマークがある。

イメージCVは神谷明。特撮ではオーレンジャーのガンマシン。

ゴーカイジャー劇場版にて黒十字王を担当した。

ライバルキー

狼鬼

百獣戦隊ガオレンジャーに登場したデュークオルグ。千年前のガオレンジャーに封印されたが、ハインスデューク・ウラにより封印を解かれた。

自分を封印したガオレンジャーを憎み、度々ガオレンジャーに挑む。

武器はその名の通り三日月の形をした三日月剣。

ムーンライトソニックやクレセントウェーブという技を使う。

更に、魔笛でパワーアニマルであるガオウルフ、ガオハンマーヘッド、ガオリゲーターを召喚して戦う。この三体の他にもガオレンジャーから奪ったパワーアニマルを操ることができる。

実は正体は千年前、ガオレンジャーの一人だった大神月麿。

当時のオルグの首領、百鬼丸を倒すために彼は鬼面を使用。百鬼丸を倒した後、鬼面によって変貌した姿が狼鬼であった。

最終的にガオレンジャーとの戦いで人間に戻り、ガオシルバーとして現代で戦うことを決意した。

しかし、その後もシルバーとは別に狼鬼が出現。

再びガオレンジャーと戦った。

怪人から戦隊ヒーローとなった珍しいキャラである。

声優は竹本英史。

狼鬼以外ではマジレンジャーvsデカレンジャーのデーモンアボロス。

ゴオンジャーのクレイズキーがある。

さすがに月麿の俳優はやってない。（月麿の俳優は玉山鉄二）

バイオハンターシルバ

超電子バイオマンに登場。バイオマンにも利用されているバイオ粒子を危険視した組織、反バイオ同盟が作ったロボット。皮肉なことに反バイオ同盟によりバイオ星は壊滅している。

反バイオ粒子を発射する銃、バイバスターを手にバイオマンをしつこく攻撃する。

バイオ粒子反応を持つものの破壊を至上の目的としており、そのためにいかなる被害が発生しても気にも止めない。

しかもバイオマンの敵である新帝国ギアの兵器、ネオメカジャイガ

ンを操ることのできる能力を持っている。このため、ギアにとっても迷惑な相手である。

実は地球に降りる時にバルジオンという巨大ロボとはぐれている。このため、「バルジオンさえあれば……」という捨て台詞を言うことも多かった。

決め台詞は

「バリオ粒子反応あり！破壊！」

デザイナーによって人造人間キカイダーのハカイダーを念頭に置いたデザインとなっている。

ハカイダーを思わせるデザインはこのため。

声優は林一夫。

ギンガマンの剣将ブドーも担当している。

流星のデレプタ

天装戦隊ゴセイジャーが戦った宇宙虐滅集団ウォースターの幹部。見かけによらずスピードが早く、両腕の鎌での攻撃を得意とする。

得意技はエネルギー弾を放つ流星弾。大量の流星弾を飛ばす流星縦横弾。より強化した流星弾を放つ超流星弾。宇宙の力を注いで強化した超銀河流星弾などのバリエーションがある。

ウォースターの首領モンス・ドレイクに認められ、実力をあげた叩き上げ系の幹部。このためか前線での戦いを好み、ドレイクに気に入られている。

ゴセイジャーの故郷である護星界と地球をつなぐ天の塔を破壊。この際に戦闘したアラタを気に入り、何度も襲いかかる。

ウォースターが全滅した後も執念でゴセイジャーに戦いを挑んだ。ドレイク同様宇宙最強に固執している。

ゴセイジャーの敵は全てなんらかの映画に因んだ名前をつけられている。

彼はおそらくプレデター。公式サイトに掲載された趣味は弱者の命

乞いを聞くこと。

声優は小山力也。

仮面ライダーBLACK RXでは俳優として霞のジョー役で出演。声優としてはうたわれるもののハクオロなどが有名。

ダークナイト

ダイナマン後半に登場した闇の騎士。

ダイナマンの敵、ジャシンカ帝国のアジト、グランギズモの居場所を知っている。にもかかわらずジャシンカの証とも言える尻尾を持たない。このため、作中の人物は正体を掴めなかった。……視聴者はだいたいわかっていたが。

額についた宝石のパワーで周囲を闇にするダークナイト・闇の舞。

それに続くダークハリケーンが主な必殺技。

ダイナレッドとはライバル関係にあり、何度も剣を交えた。

声優は林健樹。

他の特撮にも（俳優として）脇役で出たことがある。

クエスターガレイ

ギムトがクエスターガイ、クエスターレイのキーを融合させて作ったキーにより変身した姿。

クエスターのパワーの源であるゴードムエンジンを2つつけており、クエスターの二倍以上のパワーを持つ。

武器はガイのグレイブラスター、レイのグレイボンバーを合わせたグレイバースト。

二丁拳銃だが、剣形態に変形させることも可能。

圧倒的な火力で敵を殲滅する。

イメージCVはガイ、レイと同じ三宅健太、鈴木千尋。

クエスターガイ

現人類とは別の進化をした人類、アシュ。

そのアシュがゴードムエンジンを埋め込まれたことで変化したのがクエスターである。

ゴードムエンジンを埋めたガジャには従わず、人類滅亡のために独自に行動する。

地球各地に眠る宝、プレシヤスを巡り、ボウケンジャーと対決した。ガイは怒りの鬼神とも呼ばれ高い戦闘力を持つ。

二丁拳銃グレイブスターを武器にボウケンジャーを何度も苦しめた。

ボウケンシルバー、高丘映土の父を殺害しており、父の敵ともいえる。

ボウケンジャーの敵はすべて過去の戦隊ロボをモチーフとしている。彼はダイレンジャーの大連王。

声優は三宅健太。

仮面ライダーディケイドのアリゲーターイマジン。

劇場版ガオレンジャーのゼウスオルグの声も演じた。

クエスターレイ

大いなる獣と呼ばれたアシュ、レイがゴードムエンジンによってクエスター化した姿。

ガイと違い、理的で冷静沈着。おもにメカニック担当。クエスターロボを作るのは彼の役目である。

更にアシュの術を扱うこともできる。レイのほうがすごい気がする。のは多分気のせいじゃない。

ショットガンと剣の機能を持つグレイボンバーを武器としている。

彼のモチーフはダイレンジャーの牙大王。

声優は鈴木千尋。

ティルスオブジアビスのルークと言われれば知っている人も多いのではないだろうか。

電王のスパイダーイマジンも演じている。

ヤミー

パンサーゴリラヤミー

ガメルとカザリが共同で生み出したヤミー。

右半身がパンサー、左半身がゴリラとなっている。パンサーのスピードとゴリラのパワーを併せ持つ。相手の攻撃をパンサー部分が受け止め、ゴリラ部分でとどめをさす戦闘スタイルをとる。イメージC Vはなし。

ティラノヤミー

真木が缶詰めの缶から生み出したヤミー。

ティラノザウルスの特徴を持つ。強靱な皮膚であらゆる攻撃を防ぎ、口から出す紫の炎で全てをやきつくす。パワーも強い。

イメージC Vは無し

怒りと協力と動き出す敵

「すみません、皆さん！」

映司の謝罪の声がクスクスシエに響く。ギムトが去った後、ゴーカイジャーによって映司はこの場所に運ばれた。映司の知り合いである泉比奈は眠る映司と見知らぬ集団に驚いた。すぐに伊達がゴーカイジャーだと教えたため、比奈は警戒を解いた。彼女もスーパー戦隊好きの1人だったのだ。

目覚めた映司は状況を聞き、ゴーカイジャーに謝った。

ゴーカイジャーがオーズの力を取り戻そうとしている間に、のうのうと眠っていた自分に責任を感じたのだ。

マーベラスは言った。

「お前のせいじゃねえ」

マーベラスは映司が責任を感じる必要は無いと思っている。全てはあのギムトの仕業だ。

だが、ここでアंकがマーベラスの勘に触ることを言った。

「そうだな。お前らがあいつを倒していたら、こんなことにはならなかった」

「なんだと？」

「嫌、そもそもアカレッドとかいうやつがあいつにちゃんと止めをさしていれば……」

マーベラスは黙っていられなかった。アंकの服をつかみ、引き寄

せる。

「なんだ、怒ったのか？」

「今、なんて言った」

「お前らやアカレッドがあいつを倒していたらコアメダルが取られることもなかった……そう言ってるんだよ！」

アंकが叫ぶ。彼も相当イライラしている。

だが、マーベラスの怒りはそれ以上だ。

アंकにその拳を叩きつける。

それをジョーが直前で止めた。

「止めんな、ジョー」

「落ち着け、マーベラス。こいつを殴つてもしょうがない」

「こいつはアカレッドとお前らをバカにしゃがった。それを許せるか！」

「憧れの人や仲間を悪く言われて怒る気持ちはわかる。だが、冷静になれ。お前の手はこいつを殴るためじゃない。夢をつかむためにあるんだ」

ジョーにそこまで言われてマーベラスも殴る気がなくなった。拳をおさめ、アंकから離れる。

「アंक。コアメダルが取られてイラついてるのはわかるけど、言い過ぎだ」「ちっ！」

アंकは席に座った。

「すみません、アंकのやつが失礼なこと言って……」「すみません」

映司と比奈がアंकの代わりに謝る。

「だから、お前らが謝ることじゃねえ」

マーベラスが気に入らないのはアंकであって2人ではない。マーベラスはなぜアंकがあそこまで苛立っているかが気になった。

「あいつにとってコアメダルってやつはなんなんだ」

「アंकにとってコアメダルは……命です」

「命？」

「はい。アंकはグリードっていうメダルでできた怪物なんです」

「右手だけで……私のお兄ちゃんにとりついてるんです……」

「お兄ちゃん……」

「ルカさん？」

ルカがお兄ちゃんという言葉に反応したのにアイムが気づく。

「嫌、なんでもないよ……」ルカはそう言ったが、アイムには察しがついていた。ルカにはリアという妹がいた。その妹をルカは助けることができなかった。だから彼女は兄弟というものをとても気にしている。今も比奈のことが気になったのだろう。

「引き離せねえのか」

「えっと……」

「アंकがついてなかったらお兄ちゃんは死んでしまうんです。だから離せません」

「比奈ちゃん……」

事実は違う。もう比奈の兄、泉信吾の体は回復している。アंकが

離れても十分生きていられる。後は意識の回復を待つだけだ。にもかかわらず比奈はアंकが兄の体を使うのを許可した。映司にはその理由にはわからない。だが、比奈が望むならそれでいいと思い、深く追及はしていない。今回も比奈がいいというならいいと思った。

「そうか……」

「なんか、オーズさんって色々と大変なんですね」

「映司でいいよ。今はオーズじゃないからね」

鎧に映司はそう言った。そこでマーベラスは思い出した。鎧が言っていたメダルオーという謎の言葉を。

「そっぴや鎧。メダルオーってなんだったんだ」

「ああ、メダルオーって言うのはですね……」

鎧が話そうとした時、クスクシエの扉が開いた。モニターを持った女性が入ってくる。

「里中さん……ということは……」

モニターの画面が光る。画面にはボールのクリームを回している男性の姿がうつる。妙に存在感のある男性だ。モニターからでもインパクトを感じる。

「出会いとは誕生が始まる前兆だ。友情……愛情……全ては出会いから生まれる」

「なんなのこの人……」

ハカセが思わずそう言った。ボールを回しながら妙なことを言う男

性。全く理解できなかった。

「はじめましてゴーカイジャーの諸君。私の名は鴻上光生。君たちの素晴らしい！！活躍はいつも聞いているよ」

「……そうか。それでなんのようだ」

「本題に入る前にプレゼントがある。里中君！！」

里中はモニターを机の上に置く。それからドアを出て、再び戻ってくる。

里中の手には箱があった。机に置いた後、箱をあける。中には大きなケーキがあった。

Gokaiigerと英語で書いてある。

「ハッピーバースデー！受けとりたまえ！」

「……誰か誕生日のやついるか」

全員首を横にふる。

誕生日の者などいない。

「それは私たちの出会いの記念だ。受けとりたまえ」

「で、お前は俺たちにこれを渡しに来たのか」

「それだけではない！火野君！」

「はい！」

「オーズのベルトが石になったというのは本当かい」

「はい……こんな風に……」

映司は石化したオーズドライバーを見せる。

「なるほど、本当のようだね。伊達君！」

「はい」

「後藤君から連絡があつた。今は治療を受けているところだろう」

「そうですか……」

先の戦いで後藤は腕にけがをした。伊達が応急処置した後、後藤には病院に行つてもらつた。伊達はいつまでもバースはやれない。いつかは一億をもらつてバースをやめる予定だ。後藤には後任を任せるつもりでいる。彼にけがをしてもらつては困る。

「映司君、オーズの力を戻す方法はわかるかい」

「ええと……わかりません？」

ゴークカイジャーのほうを向いて映司は聞く。

「モネとかはキーを手に入れたら変身できたんだからキー取り返せばいいんじゃない？」

モネとは天装戦隊ゴセイジャーの一人だ。ゴセイジャーは一度レンジャーキーを手にいれてゴセイジャーに変身する能力を取り戻したのだ。なら、オーズもキーを取り返せば……

「オーズのレンジャーキーを取り返せば力は戻ると思うよ」

「だそうです」

「そうか……ゴークカイジャーの諸君、オーズの力を取り返すのに力を貸してくれないか」

皆がマーベラスに注目する。全てはマーベラスの決定次第だ。

「一つ……条件がある」

その頃、ギムトは自身の宇宙船の中にいた。

その中にザンギャック皇帝の息子、ワルズ・ギル。 彼が副官のダマラスを連れて入ってきた。

「これはこれはザンギャックの王子殿。一体何のご用ですか」

「ギムト、俺が地球に行く許可をお前に与えたのは、お前が海賊どもを倒すと約束したからだ！倒さずに帰ってどうする！」

大げさに怒るワルズ・ギル。ザンギャック皇帝の息子はキレっばいという話は本当だったようだ。

「ご心配は入りません。次は確実に連中を始末します」

「当然だ！それとお前に聞きたいことがある！」

「なんででしょう」

「モバイクロスとか言ったな。あの道具を見せろ」

「わかりました」

ギムトはモバイクロスを取り出す。ワルズ・ギルとダマラスはまじまじと見てくる。

ダマラスがギムトに聞く。

「ギムトよ。この道具はどこで手に入れた」

「あなた方に申す必要があるのでしょうか」

「なんだと！我々ザンギャックに答えられないというのか！」

ダマラスの質問に答えなかったギムトにワルズ・ギルが怒る。ダマラスはワルズ・ギルを手で遮る。

「ならば質問を変えよう。その機械には黒い十字架が書いてあるな」

確かにモバイクロスにはモバイレーツにおいて海賊マークが描かれるところが全て黒十字に置き換わっている。ダマラスはそれであることに気づいた。

「お前がそのメカをもらった闇……それは黒十字王と何か関係があるのではないか」

「くくく……ハハハハハ！ご名答。まさかやつのことを知っていたとは……」

ギムトはあっさり認めた。

「その通りだ。私は宇宙を漂流している時、彼に出会った。彼は私の心の闇に惹かれたと言った。私にライバルキーを与え、スーパー戦隊への復讐を果たすように命じたのだ」

ギムトは最初はその命令に従おうとは思わなかった。だが、アカレツドがスーパー戦隊の一人であり、レンジャーキーがスーパー戦隊の力であると教えられた。そこで決めた。スーパー戦隊を滅ぼすことでアカレツドの復讐を果たすことを。

「そして私は宇宙海賊が地球に向かったことを知った。そこで奴らを倒すために地球に降りたのだ」

「だが、突き止めるのが遅かったな。既に黒十字王はスーパー戦隊どもに敗れ去った」

「案ずるな。私はやつのようなへまはしない。必ずやつらを地獄に落としてみせる」

「期待しているぞ！」

ワルズ・ギルがそう言い、ギムトから背を向ける。ギムトは実はパワーキーガンを背中に隠していた。

それをワルズ・ギルに向け、引き金を引こうとした。その時、ダマラスがギムトの腕をつかんだ。

「なんの真似だ」

「ちよつと殿下をからかおうとしただけです。そう怒らないでください」

「次やれば命が無いと思え」

ダマラスは手を離し、ワルズ・ギルの後に行く。

2人は宇宙船を出た。

「本当は狙いはあなただったのだがな」

ギムトはパワーキーガンを降ろす。本当はワルズ・ギルをダマラスがかばってくれると期待していた。ワルズ・ギルに当たったら当たったで彼のキーを人質にダマラスと交渉するつもりだった。だが、予想以上にダマラスの能力が強かった。

「まあいい。またの機会にしましょう」

ザンギヤックの中でも最強クラスと言われるダマラスの強さ。それを手に入ればザンギヤックに邪魔されることなく、宇宙全ての宝を手に入れることができる。ギムトは自らが全ての宝を手に入れた光景を夢想した。それはとても幸せで充足を感じる光景だった。それを手に入れるためなら自分は何でもする。ザンギヤックを倒し、宇宙をひっくり返すことも。ギムトにはその自信があった。ライバ

ルキーを手に入れてから無限に欲望が溢れてくる。自分に不可能などないと思えた。

ギムトはモニターを見る。そのモニターにはメダルの怪物の姿が映っていた。どうやら早く動いたほうが良さそうだ。

「コアメダルも宇宙最大のお宝も全て私のものだ」

ギムトは再び地上に降りた。

ギムトがモニターを見るちよつと前。

カザリ達は仲間であるドクター真木の館に戻り、真木にオーズのことを話していた。

「オーズのベルトが石化した？」

「信じられないけどね。宇宙人の仕業みたいだ」

「宇宙人……ザンギャックですか？」

「ちよつとわからないけど多分そうじゃない」

カザリの答えは少し投げやりだった。宇宙人は彼にとって専門外だった。

「でもドクター、今がチャンスだ」

「わかっています。オーズが変身できない今、コアメダルを入手する絶好のチャンスです」

「じゃあ、早く行こうよ」

小さな子供が急かす。彼はアंक。オーズ側のアंकが失った右腕以外のアंकの体だ。彼は右腕を手にいれ、完全となることを望んでいる。今がその最大のチャンスであることに気づいたのだ。

「ちょっと待ちなさい。あのゴーカイジャーとかいう連中の対策をとるべきよ」

「どうしたんだい、メズール。臆したのかい」

「そうじゃないわ。やつらの強さは認めざるを得ない。正面から戦ったらただ消耗するだけよ」

「確かにね……」

カザリも考える。メダルを持っていないゴーカイジャーと真正面からぶつかっても消耗するだけだ。

「じゃあ、2手に別れようよ」

小さいアंकが提案した。

「カザリ達が暴れてやつらを陽動する。僕はそのうちに別方向からメダルを奪うよ」

「あなた、私たちを囷にするつもり？」

「良いじゃないか。僕が手に入れたメダルを君たちに渡せば、ゴーカイジャーも倒せるはずだよ」

アंकの策は確かにいいように思うが……だが、自分だけメダルを奪うつもりではないかとメズールは疑っていた。右腕のアंकが自分達を裏切ったように。

「カザリ、どう思う？」

「大丈夫じゃないかな。僕たちは時間稼ぎに徹すればいいし」

メズールはカザリの耳元で喋る。

「そうじゃなく……アंकよ。前のアंकのように裏切ったりはしないわよね」

「大丈夫さ。彼はそこまで愚かじゃない」

メズールは少し不安を感じたが、結局この作戦でいくことにした。他にいい計画が無かったためだ。

「では行きましょう」

真木はセルメダルを缶詰めの缶に投げる。すると缶に穴が空く。その中にメダルが入り、ヤミーが生まれた。これが人間から恐竜系のグリードに進化したつある真木有能力だ。

「スーパー戦隊と地球の歴史を終わらせるために」

そういう真木の目は紫に輝いていた。

クスクシエの中

「俺に謝れだど！？」

「そうだ」

マーベラスは別に協力しても良かった。ギムトは自分にとっても倒さねばならぬ敵だ。確実にお宝探しの障害になる。

だが、マーベラスはチャンスと思った。アंकにアカレッドをバカにしたことを反省させるチャンスだと。

「お前が謝らないなら、オーズのレンジャーキーは俺たちがもらう」

「てめえ……」

「さあ、どうする」

アंकは葛藤した。謝るのは自分のプライドが許さない。だが、オーズの力が無ければ……

『君は僕だ』

もう一人の自分のことが思い出される。今あいつに来られたら自分は確実に吸収される。その時、果たして自分の意思が残るかどうかなんとしても吸収されるのは阻止せねばならない。

「アंक、謝らないとアイス抜きだぞ」

「なんだと!？」

冗談ではない。アイスは自分にとってどれほど大事か映司にはわからないのか。初めて味わったアイスの味がどれだけ強烈だったことか。プライドとアイス、どちらを取る？決まっている、アイスだ！

「う……う……う……」

ごめんなさいだ。言わねばならない。消滅しないために。アイスを取られないために言わねばならない。アंकは自分のプライドを捨てた。

「ごめんなさい!」

頭を下げる。

その様子にマーベラスは満足した。鴻上も満足した。ジョーはクールだった。ルカはちょっと驚いた。アームはお茶を飲んだ。ハカセ

と鎧もお茶をもらった。映司と比奈は哑然とした。
アंकが謝ることなどあり得ないと内心思っていたからだ。映司は
改めてアイスの威力に驚いた。

「オーズのレンジャーキー、必ず奪い返せ」
「ああ、いいぜ」

マーベラスは満足だった。

「アंक」
「映司、いい……か」

アंकはちよつと引いた。映司が両手にアイスを持ち、いつもより
キラキラした笑顔だったのだ。

「アंक、お前よく謝ったな」
「ああ……」
「ほら、ご褒美だ」

ご褒美ってなんだ！俺はペットじゃないぞ！そうアंकは叫びたか
ったが抑えた。余り今の映司に関わりたくなかった。
アंकはただアイスを受け取った。

伊達は珍しいことがあるもんだと思った。

「ところでギムトとはどう戦うの。あいつ、かなり強いよ」
「あいつとは俺がけりをつける」

ハカセにマーベラスはそう返した。

「マーベラス……」

「あいつはアカレッドが倒しそこねた男だ。だから俺が倒す」

アカレッドの尻拭いとかではない。ただ、自分の借りを返したい。海賊のプライドにかけて。これ以上ギムトに好き勝手させはしない。マーベラスは固く決意した。

その時、映司とアंकはメダルの気配を感じた。伊達が机に置いたゴリラカンドロイドも反応する。

「グリード達が来たみたいだな」

伊達はセルメダルを入れたメダルタンクを担ぐ。

「じゃあ、行ってくるよ」

「一人じゃ無茶です。ゴークアイジャーに頼んで誰か」

「火野、俺は最初に会ったところに言っただ。一億円。それを手に入るためには誰の手も借りない。だから、一人で行くぜ」

「え、でも映司君や後藤さんの手を借りるのはいいんですか」

比奈が思わず突っ込んだ。伊達と映司は慌てて弁解する。

「嫌、火野とはギブアンドテイクだし……」

「そうそう。ライダーは助け合い」

「それに後藤ちゃんもいずればース任せるから今のうちに戦いになれてもらっとかないと……」

「そうそう」

「つまり、ギブアンドテイクが成り立ってればいいんですか」

「そうさ」

「なるほど」

比奈は納得したような顔になった。

「じゃ、今度こそ行くぜ」

伊達はクスクシエのドアを開く。

「待ちたまえ伊達君」

今度は鴻上が止めた。伊達は少し渋い顔をする。

「会長。人がかっこつけて出ていこうとしているのに引きとめないでください」「それは悪かった。だが、後藤君からの頼みでね。君にサポートをつけることにした」

いつの間にか戦闘用のスーツ姿になった里中がいた。後藤からもらったのか、バースバスターを持っている。

「里中君は優秀だ。君の役に立つだろう」

「後藤ちゃん……感謝するぜ。ゴーカイジャー、火野とアンコを頼んだぜ！」

伊達と里中は今度こそ出ていった。

「行ってしまいましたね」「一億とかルカみたいな人だったね」

「一緒にしないでよ、ハカセ」

だが、お金が好きなのはルカも一緒である。ハカセの言葉は間違っていない。

「心配です。俺、行ってきます」

伊達を心配した鎧が出ていこうとした。
それをマーベラスが止める。

「待て、鎧。お前は俺と一緒にだ」

お前は俺と一緒に……その意味を鎧が聞くより早く、マーベラスは指示を出す。

「ジョー、ルカ、アトム、ハカセ。お前らはあいつを助けてやれ」
「戦力を分けるの？」

「そうだ。ギムト相手に乱戦は避けたいからな」

ギムトは戦場の中で宝を盗んだこともあるという話だ。更に多くの人が見ている目の前で宝を奪った男。乱戦であろうと己の思うまま動ける男だ。

マーベラスは少数精鋭で真っ向から叩き潰すことを決めた。

「わかった」

「オーケー」

「行ってくるよ」

「マーベラスさんと鎧さんも気をつけてください」

4人はマーベラスのことを信じ、戦いに向かった。

「俺たちも出るぞ」

「ここじゃ、クスクシエが危ないからね」

だがその前に。マーベラスはモニターを見る。

「鴻上。オーズの大きいなる力、知らないか」

「オーズの大きいなる力……君たちが探していたのはそれが。残念ながら私は知らない。しかし……」

「しかし？」

「誕生はいつも突然だ。スーパー戦隊と仮面ライダー。その出会いが何かを誕生させるかもしれない」

「どういう意味だ」

「誕生……その瞬間にわかるさ」

モニターが切れた。

マーベラス、映司、アंक、鎧はクスクシエを出た。比奈が一人残される。

「皆さん、無事に帰ってください」

比奈はクスクシエの中で祈った。皆の安全を。

怒りと協力と動き出す敵（後書き）

今回はマーベラスとアングの激突でした。余り激突していない気がします。

次回はマーベラスが大活躍します。
お楽しみにしてください。

アंक対マーベラスの決闘（前書き）

タイトル通りアंकとマーベラスの戦いです。元ネタに気づいた人は感想に答えを書いてください。

アंक対マーベラスの決闘

「まさか仮面ライダーのマシンに乗れるなんて……すごいですよ、マーベラスさん！」

「ああ、バイクつてのも悪くないかもな！」

マーベラス、鎧、アंक、映司。4人はライドベンダーで移動していた。本来ライドベンダーは鴻上フアウンデーションが登録した人物しか使用することはできない。一般人には普通の自販機だ。マーベラスと鎧が使えるのは鴻上が許可したからだ。

今、マーベラス達はあまり人気の無いところに移動している。

「でもマーベラス、ギムトはこっちに来るかな」

「来る。やつの狙いは俺たちとコアメダルだ。今、コアメダルを持つていて一番弱いのはあいつだからな」

「ちっ！体さえあれば……」

アंकは右腕だけのグリード。今までオーズという力があつたからこそアंकは生き残れた。そのオーズがないアंकなど赤子同然だ。アंकは己の脆さに苛立ちを隠せなかった。

「でもそれならグリード達もアंकさんを狙いますよね」

「だから、ジョー達を行かせたんじゃないか」

ジョー達と伊達が力を合わせれば確実にグリードを倒せる。マーベラスはそう信じていた。

映司もあのメンバーなら問題ないと思った。

その時、映司とアंकは感じた。強大な欲望の気配を。

「マーベラスさん、鎧さん、気をつけてください！」

4人の背後から炎が飛んでくる。4人はライドベンダーを操ってかわした。映司の注意が無ければ当たっていたかもしれない。4人は背後を向く。

空から赤い怪物が飛んでいる。左肩だけに生えた炎の翼で。右腕と顔の右側が紫色で不完全な印象を感じる。左腕は……アंकの右腕と同じだった。

「そんなもので逃げられると思ってるのかい。僕」
「うるさい。お前は俺だ！」

その怪物の名はアंक。オーズ側との区別のため、アंक（ロスト）とする。アंक（ロスト）は火炎を出してマーベラス達に放つ。

「おい、あいつはなんだ」

「あいつは俺だ！」

「わけのわからないこと言うな！」

言い合う間も4人は火炎弾をかわす。

「あいつはアंकが800年前に失った体なんです」

「お前のせいだ！自分の体ぐらいちゃんと面倒見る！」

「うるせえ！やれるならやってる！」

マーベラスの文句にアंकが返す。アंकとて自分の体を取り戻したい。だが、アंक（ロスト）に取り込まれれば、自分の意思も取り込まれる可能性が高い。だからアंकはまずアंक（ロスト）をオーズに倒させようとした。その後、体に取戻す考えだった。

「仕方ない、あいつは俺が倒す」

「マーベラスさん!？」

「鎧、お前は火野とアंकを守れ!」

「いえ、あいつは俺が」

鎧は自分がアंक（ロスト）を倒すと言おうとした。しかし……

「いいから言うことを聞け!」

「は、はい」

マーベラスに強く押しきられ、鎧は了解した。

「頼んだぞ。ゴーカイチェンジ!」

『ゴーカイジャー!』

ゴーカイレッドとなったマーベラスはさらにレンジャーキーをとる。

「ゴーカイチェンジ!」

『ジェットマン!』

ジェットマンのリーダー、レッドホークになったマーベラスは空中に飛び立つ。

「お前の相手は俺だ!」

ホルスターからバードブラスターを抜き、アंक（ロスト）に向かって撃つ。

「僕の邪魔をするな!」

アंक（ロスト）はブラスターからのビームをかわし、炎をマーベラスに放つ。マーベラスは炎をかわし、ブラスターを撃っていく。

「今のうちに行け！」

「はい！」

鎧たちは加速、アंक（ロスト）から離れていく。それに気づいたアंक（ロスト）は追いかけてようとする。

「待て！」

「お前の相手は俺だ！」

マーベラスはブリンガーソードで斬りかかる。

アंक（ロスト）はそれをかわすのに集中せざるを得なかった。どんどん鎧達は離れていく。マーベラスの期待通りだ。

「なんとかやれよ、鎧！」

鎧達は人気の無い廃工場の近くについた。ここなら関係のないものを巻き込むことはない。

「ここでマーベラスさんが来るのを待ちましょう」

「そうだね」

「その必要は無い」

工場の中からギムトが現れた。

「おまえたちの首を取り、あの赤い海賊に見せつけてやる」

ギムトはキーを取り、モバイクロスに差す。

『デレプター!』

音声が響き、ギムトは赤いカマキリのような怪物に姿を変えた。腕についた刃を合わせ、火花を散らせる。

「お二人とも下がってください! ゴーカイチェンジ!」
『ゴーカイジャー!』

鎧はゴーカイシルバーに変身し、ギムトにゴークイスピアを向ける。

「映司さん達には指一本触れさせない!」
「ほざけ!」

2人は相手を倒すため、走る。

その頃、伊達とジョー達はグリード達を率いる真木と対峙した。

「やはり邪魔しに来ましたか。ゴークイジャーに伊達君」
「あいつ人間か?」

ジョーが真木を見て疑問に思う。なぜ人間がグリードの仲間をしているのだ。

「もはや人間ではありません。私はグリードです」

その事を示すように真木の瞳が紫に輝く。

「ドクター、あんた本気で人間やめる気か」

「そうです。全ては世界を終わらせるために」

「世界を終わらせるだって!？」

「なぜですか。あなたも人間でしたのに……」

ハカセとアイムの疑問に真木は答える。

「ゴークイジャー、あなたたちにはわからないかもしれませんが……人間は長く生きれば醜くなります。どんな理想も優しさも、生きていけば人間は失います。だから私が終わらせるのです。美しく清らかなうちに……」

それが姉との生活から真木の出した答えだった。

「バツカじゃないの? そんな考えに他人を巻き込むなんて。終わるときや勝手に終わりなさいよ」

ル力は真木に怒りの言葉を出す。真木はため息をついた。

「やはりわかってもらえませんか」

「わかりたくもないな」

「確かに人間は生きているうちに色々なものを失います」

「でもそれに負けないぐらい素晴らしいものを得る」

「それに私たちはまだまだ夢を追う途中よ。こんなところで終わるもんですか」

「そうだぜ、ドクター。人間は誰かに何かを残していく。それを誰かが受け取って未来に繋いでいく。そういうのがいいんじゃないか」

「ゴーカイジャーと伊達は真木に対して反論を述べる。
5人を見て真木はもうこれ以上語ることはないと思った。

「夢も未来も終わりです」

カザリ達グリードが動き始めた。

「夢はここからだ」
「未来もな」

ジョー達はレンジャーキーをモバイレーツに差す。伊達はセルメダルをベルトに入れ、ハンドルを回した。

「ゴーカイチェンジ！」
「変身！」

『ゴーカイジャー！』

変身した4人とバース、里中はグリードに挑む。

マーベラスはアンク（ロスト）を相手に対等に戦っていた。アンク（ロスト）は苛立ち始めた。
一刻も早くアンクを取り込み、完全な存在に近づきたい。なのに、この赤い戦士が邪魔をする。正直なところ、アンク（ロスト）は簡単にマーベラスを倒せると考えていた。彼は自我の成長により多少なりとも人間への理解が進んだ。人間はすぐに欲望にとりつかれ、それを抑えることができない。心のどこかで常に何かを欲しがって

いる。そのくせ、行動に移せない。自分達グリードが生み出すヤミ
ーはその隙をつき、欲望を暴走させる。人間はグリードにとって餌
に過ぎない。例外があるとすればそれはオーズだけだった。なのに
ここに来て現れた新たな例外。その存在にアंक（ロスト）は苛立
つ。

「お前、一体何者だ！」

「ただの海賊だ！」

「海賊なら……海で寝てる！」

アंक（ロスト）は左手から火炎放射。マーベラスを焼きつくそう
とする。

「お断りだ！」

マーベラスは上空に飛んでかわす。

「お前こそさっさと寝ろ！」

そしてバードブラスター。

アंक（ロスト）は横にずれてそれを避けた。

「ちっ、すばいやっ」

マーベラスは焦っていた。マーベラスも早くアंक（ロスト）を倒
して鎧達のもとに行きたい。

だが、アंक（ロスト）は素早く、火炎の威力も侮れない。
一撃で仕留めたいが、中々懐に入れなかった。

「せめてこいつが地上に降りてくれれば……」

ターボレンジャーの高速移動などの大技で一気に片付けられる。だが、アंक（ロスト）が空中から降りる気配はない。それにアंक（ロスト）の目標はあくまでアंकだ。自分が地上に降りたら、その際にアंकのもとに行こうとするだろう。

「どうする……」

空中戦ができるレッドは後はパルイーグルとハリケンレッドだが、どちらも大技をかけるには接近する必要がある。あの火炎をかわして接近するのは困難だ。

「やるしかねえか！」

このまま牽制しあっても拉致があかない。
マーベラスは懷に飛び込む覚悟をした。

「近づく？ いいのだよ！」

アंक（ロスト）は左の片翼から炎の羽を放つ。
マーベラスはそれをかわし、あるいはブリンガーソードで切り落としていく。

「これで終わりだ！」

アंक（ロスト）は左手から炎を放つ。

「ゴーカイチェンジ！」

『ハリケンジャー！』

「ドライガン！」

忍風戦隊ハリケンジャーのハリケンレッドにマーベラスは変身した。
ドライヤーのような銃、ドライガンを取る。ドライガンは炎を出し、
アंक（ロスト）の火炎を相殺。爆発を起こす。

「くっ！」

爆発の向こうにマーベラスがいるはず。アंक（ロスト）は左手を
向ける。だが、爆炎の晴れた跡にマーベラスはいない。

「あいつ、どこに」

「こっちだ！」

いつのまにかマーベラスはアंक（ロスト）の背後にいた。

「超忍法・空駆け！」

マーベラスは振り向いたアंक（ロスト）の胸を足で押す。そのま
ま刀のハヤテ丸でアंक（ロスト）を斬りまくる。

「ぐああ！」

アंक（ロスト）はビルの壁に激突する。ビルの下と中の人達が驚
いた。

いつの間にか街についてしまったようだ。

マーベラスはそのままアंक（ロスト）の体を蹴って離れる。
そして上空でモバイレーツにレンジャーキーを入れた。

「ゴーカイチェンジ！」

『ゴセイジャー!』

ゴセイジャーのゴセイレッドに変身したマーベラスは同時に出現したスカイクソードを取る。

「レッドブレイク!」

マーベラスは空中で縦回転しながらスカイクソードを振りまわす。

アंक（ロスト）の体が何度もスカイクソードで斬られていく。

「はああ!」

最後に渾身の力を込めた一振りを放つ。

「うああああ!?!?」

アंक（ロスト）の胸に一筋の傷ができ、メダルが流れる。
周辺にいた人々は逃げるように離れる。

地上に降りたマーベラスはその流れの中に赤いメダルを見つけた。

「ぼ、僕のコアが……」

アंक（ロスト）は流れるメダルを抑え、どこかへ飛んでいく。

「なんとかなったな……っ!」

マーベラスが膝をつく。体に痛みを感じる。

アंक（ロスト）の攻撃を相殺した時、ダメージを受けたらしい。
だが、この程度の傷、大したことはない。マーベラスはアंकが

落とした赤いメダルを拾う。そのメダルにはコンドルが描かれていた。

「今行くぞ、鎧！ゴーカイチェーンジ！」
『カーレンジャー！』

カーレンジャーのレッドレーサーになったマーベラスは走る。ギムトと戦う鎧達のもとへ。

アंक対マーベラスの決闘（後書き）

お読みくださりありがとうございました。

これでマーベラスは2人のアंकに勝ちました。

次回は鎧とギムトとの戦いです。

次々とレンジャーをチェンジさせますので楽しみにしてください。

鎧と恐竜と連続チェンジ（前書き）

今回は連続でチェンジします。
それではお楽しみください。

鎧と恐竜と連続チェンジ

流星のデレプタに変身したギムトは大柄な体に似合わぬスピードで動き回る。

鎧はそのスピードについていけず、防戦一方だった。

「流星弾！」

ギムトは両腕からエネルギー弾を放つ。鎧は弾をもろに食らってしまった。

「うああ！」

「鎧くん！こうなったら」

映司はメダジャリバーを取り出す。鎧を援護する気だ。

「よせ、映司。オーズになれないお前の勝てる相手じゃない」
「でも……」

アंकが映司を止める。それでも映司は戦おうとした。誰かが戦っているのに黙っていることなどできない。その時、鎧が立ち上がった。

「お二人とも！ここは俺に任せてください！」
「鎧くん！」

「スーパースーツ隊は仲間との約束を破りません。マーベラスさんはあなた達を守るように言いました。必ずあなた達を守って見せます！」

鎧はレンジャーキーを取り、ゴーカイセルラーにセットする。

「ゴーカイチェンジ！」

『ゴセイジャー！』

「ゴセイナイト！」

鎧は星を守る宿命の騎士、ゴセイナイトに変身した。流星のデレプタもゴセイジャーの戦った敵だ。だが、ゴセイナイトが参戦した時デレプタは既に倒れていた。実現しなかった戦いが思わぬ形で始まった。

「行きますよ！レオンレイザー！」

獅子の咆哮とともにレオンレイザーから光線が放たれる。

ギムトは己の防御力を信じ、光線を食らいつつも突撃する。

「効かな！」

「レオンレイザーソード！」

ギムトの両腕についた鎌にエネルギーをソードの形にして対抗する。

軽快に襲い来る鎌をソードで防いでいく。

「ナイトメタリック！」

鎧はソードにエネルギーを集中。高速で接近し、ギムトを二度切り裂く。

「ぐおお！」

デレプタに変身したギムトといえどこれは効いた。

「やってくれたな。流星縦横弾！」

ギムトは周りに10個以上の流星弾を出現させる。弾が一斉に鎧に襲いかかる。

鎧は慌てず、携帯型アイテムのレオンセルラーにカードを入れる。

「ディフェンストームカード、天装！」

レオンセルラーを閉めるとカードが発動。風の壁が出現し、流星弾を弾き返す。

「ちつ、そのバリアこと打ち砕いてやる。超流星弾！」

ギムトは目の前の流星弾にエネルギーを集中、より強力なエネルギー弾を発射する。

「トライアングロバルカード、天装！」

再び鎧はカードをレオンセルラーに入れて対抗する。

風、大地、海、3つの力を持つトライアングルの壁が鎧の前に出現。超流星弾を受けとめた。

「なんだと！」

しかもトライアングルが一点集中。光線となってギムトに放たれる。

ゴセイジャーに変身する護星天使はスカイツク、ランディツク、シィツクの3種族に別れている。普通は他の種族の技は使えない。

唯一地球からパワーを得たゴセイナイトだけが3属性を自由に使える。

そのゴセイナイト最大の秘技がこのトライアングローバル。

3属性の壁を出現させ、その力を光線として放つ攻防一体の究極の技だ。

ギムトは防ぎきれず、デレプタの鎧を破壊される結果になった。

「やってくれたな」

「どうですか、星を守る宿命の騎士の力は！」

「すごいよ、鎧くん！」

映司が鎧を誉めた。

ギムトは新たなキーを取る。

「お前が星を守る騎士なら俺は闇の騎士だ！」

『ダークナイト！』

黒色の騎士にギムトは変身した。ダイナマンと戦ったダークナイトだ。

「ダークナイト、闇の舞！」

ダークナイトの額の宝石が輝く。すると世界が闇に包まれた。そしてダークナイトは闇闇に消える。

「な、なんだ」

「真っ暗だ」

鎧に見えるのは暗闇の中、回転する緑色の光を放つ剣だ。不気味に

剣は回り続ける。

「こ、この！」

鎧はレオンレイザーを剣の回りに撃ちまくる。
だが、全然レーザーが当たらない。

「ふはは、無駄だ無駄だ！ダークハリケーン！！」

ダークナイトは剣で鎧を突いた。その強烈な突きはゴセイナイトへの変身を解除した。

「ふはは、闇の中で眠るがいい！」

「まだまだここからです！ゴーカイチェンジ！」

『ボウケンジャー！』

鎧は眩き冒険者、ボウケンシルバーに姿を変えた。

「サガスピア！サガスモード」

鎧はサガスピアで相手の位置を探る。地球に眠る宝、プレシャスさえ見つけるサガスピア。その探査能力なら闇に隠れた騎士さえ見つけられるはずだ。

『HIT！』

サガスピアから音声が響く。敵がこの先にいるということだ。

「そこだ！」

サガスピアを一閃。ギムトが変身したダークナイトはそこにいた。

「何！」

「サガスラッシュ！」

サガスピアの眩き刃がギムトを切り裂く。

ギムトは胸を抑える。

闇が晴れた。

「おのれ。だがこいつには敵うまい！」

『クエスターガレイ！』

ギムトは今度は2体の怪人がくつついたような怪人に姿を変えた。

肩アーマーの形や使われている色の違いはあるが、よく似た怪人を使っているようだ。

「なんですか、それ」

「なんか、Wみたいだ」

映司はかつて共に戦った風の街のライダーを思い出した。そのライダーも左右で色が違うボディだった。

「2つのキーを融合させたのさ」

ギムトはボウケンジャーと戦ったクエスターガイ、クエスターレイのキーを融合させ、ガレイを生み出したのだ。

「食らえ！」

クエスターガイの二挺拳銃、グレイブラスター。

クエスターレイの銃と剣の機能を持つ武器、グレイボンバー。

その2つの機能を併せ持つグレイバーストを連射する。

「くっ！」

グレイバーストは驚異的な速度で弾丸をまき散らす。圧倒的な火力。鎧はなんとか避けているが反撃できない。

「このままじゃダメです。ゴーカイチェンジ！」

『ゴーオンウイングス！』

鎧はゴーオンゴールド、ゴーオンシルバーが合体した戦士、ゴーオンウイングスに変身した。

鎧は両手に持ったロケットダガーについているボタンを押す。

『ミッション6・フルパワー！』

ロケットダガーを使って鎧は空を飛び回る。だが、驚異的な連射速度を誇るグレイバーストの火力に、近づくことができない。

「ちょこまか飛び回りおって！」

「アंक、何か手は無いか」

映司はアंकに策を求めた。

「あいつを助ける気か」

「そうだ。このまま黙ってみるなんてできない」

映司は鎧を死なせるわけにはいかないと思った。そのためにできることがあるなら、なんでもしてやりたい。もうあの日の……手を伸ばせない後悔を味わうのは御免だ。

「クスクシエに戻ったらアイス追加だ」

「わかった、なんとかするよ」

アंकは乗ってきたライドベンダーを自販機型のベンダーモードにする。

「こいつにセルメダルを入れれば……」

アंकはセルメダルを投入した。

「皆さん、これで戦いましょう」

アームの提案を受け、三人は同じ戦隊のレンジャーキーを選んだ。

「ゴーカイチェンジ！」

『ジュウレンジャー！』

ゴーカイジャーは恐竜戦隊ジュウレンジャーに変身し、グリード軍団に対抗する。

「リーダーなしで僕らに勝てると思ってるの？」

カザリが鋭い爪でタイガーレンジャーに変身したルカを狙う。

「マーベラスがいなくても、あんた達ぐらい倒してやるわ!」

ルカは両手に持つサーベルダガーで爪を受ける。そのまま、カザリにダガーで反撃する。

「そうです。私たちは負けません!」

プテラレンジャーになったアイムはプテラアローを引く。

「勝って世界最大のお宝を見つけるんだ!」

マンモスレンジャーになったハカセはモスブレイカーを撃つ。
ピンクの矢と紫の弾がガメルに命中する。

「痛いー!よくもやったな!」

ガメルは腕をぶんぶん振り回す。鼻をゾウのように伸ばし、2人を
屈^くぎ^ぎ払^はう。

「その欲望、私たちが呑み込んであげるわ」

メズールは水をムチのように操り、ジョーに攻撃する。

「残念だったな。俺たちの夢はお前には呑み込めない」

トリケラレンジャーに変身したジョーはムチをかわしトリケランス
で突く。

「夢？欲望と何が違うのかしらね！」

メズールは水流を放つ。ジョーはそれに流される。

「そうだな。欲望は人を惹き付けない。だが、夢は人を惹き付ける！」

立ち上がったジョーはトリケランスを回転させる。巻き起こる風。風はメズールの体を切り裂く。そこをトリケランスでジョーは突いた。

「きゃっ！」

伊達と里中はヤミーと対峙していた。真木が出したヤミーはティラノザウルスに似たティラノヤミーだった。

紫に染まった体には太い尻尾と強靱な足、鋭い爪がついている。

「バース、お前を破壊する！」

「壊せるもんなら、壊してみな！」

バースはバースバスターを乱れ撃つ。里中も一緒にティラノヤミーを撃つ。

ティラノヤミーはまともに集中砲火を受けた。

「バース、破壊する！」

だが、ティラノヤミーはまだまだ大丈夫そうだ。

「頑丈なやつだな……って弾切れ!？」

弾が切れて慌てる伊達にティラノヤミーは口から紫の炎を放つ。
バースの装甲が焼かれる。

「ぐああ!」

「伊達さん!」

里中はバースバスターを撃ちながら予備のメダルポッドを投げる。

「サンキュー!」

伊達はそれを受けとるとバースバスターの先端にメダルポッドをつける。

「一気にケリをつけてやる!」

『セルバースト!』

バースバスターから黄色のエネルギー弾が撃たれる。それはティラノヤミーの体を爆発させた。

「こいつでさすがに……」

爆炎の中からティラノヤミーは突撃。バースを弾き飛ばす。

「バース、破壊する!」

そのまま倒れたバースを踏みつける。

里中は伊達を助けるべくバースバスターでティラノヤミーを撃つ。

「邪魔するな！」

ティラノヤミーはバースを踏んだまま、里中に炎を発射する。

「くっ！」

直撃はかわした里中。しかし、火炎が爆発を起こし、それに巻き込まれる。

「ハカセさん、伊達さんの援護に！」

「わかった！」

ハカセはガメルの相手をアイムに任せ、モスブレイカーをティラノヤミーにぶつける。

ティラノヤミーは足を伊達から離す。だが、逆にハカセがティラノヤミーに殴られた。

「うわあ！」

『シャベルアーム！』

伊達はなんとか立ち上がり、シャベルの形状をしたシャベルアームでティラノヤミーを殴る。

「大丈夫か」

「なんとか」

互いを気遣う伊達とハカセ。

「バース、ゴーカイジャー！全て破壊だ！」

ティラノヤミーは2人に火炎放射を放った。

「うああ！」

鎧はグレイバーストの砲火を受け、地上に落ちる。

「赤き海賊団の男……やつの仲間になったのがお前の不幸だ」

ギムトは倒れた鎧にグレイバーストを向ける。

「マーベラスさんの仲間になって……不幸なことなんて無いです」
「愚か者め。お前の首をやつに晒してやる」

ギムトは引き金に指をつける。鎧はなんとか体を動かそうとする。
その時、大量のタカ型のメカがギムトに襲いかかる。ギムトの注意がそちらに向く。

「なんだ、こいつら……ぐう！？」

ギムトの体にウナギ型のメカが絡みつく。

「鎧くん、今のうちだ！」

映司が叫ぶ。タカもウナギも映司がライドベンダーから出したカンドロイドだ。

「はい！」

立ち上がった鎧は両手のロケットダガーのボタンを押す。

『ミッション3！』

「ダブルライトニングダガー！」

鎧は両手のロケットダガーに電撃を纏わせ、ガレイの胸を斬る。ガレイの体に強力な電流が走った。

「ぬああ！おのれ！」

ギムトは無理やりウナギカンドロイドを引き剥がした。

「もう許さん！貴様にはこいつの恐怖を思い知らせてやる！」

ギムトはついにオーズのレンジャーキーを取った。さらにメダルホルダーからコアメダルを取りだし、モバイクロスにキーを差した。

『仮面ライダーオーズ！』

ギムトが光に包まれる。同時にオーズドライバーにメダルが入り、自動でスキャンされた。

『タカ・トラ・バッタ！タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ！』

ギムトは仮面ライダーオーズ、タトバコンボに変身を遂げた。トラクローを展開してギムトは言う。

「真の恐怖はここからだ！」

鎧と恐竜と連続チェンジ（後書き）

今日のゴーカイハリケンコロボは最高でした。

やはりヒーローの共演はいいものです。

特に9人が連続攻撃するのがかつこよかったですね。

今回はゴーオンウィングスと同じ合体戦士であるクエスターガレイを出してみました。やはり合体はいいものです。

では感想や意見を待っています。

レッドスペシャル（前書き）

今回はスーパー戦隊の顔、レッド戦士が大活躍！是非彼らの活躍をお読みください。

レッドスペシャル

「オーズ……」

仮面ライダーオーズに変身したギムト。その姿に改めて映司はオーズを奪われたことを実感する。映司は苦い顔をした。

アंकが叫ぶ。

「銀色！そいつからさっさとキーを取り戻せ！」

「お任せください！」

ゴーオンウィングスからゴーカイスルバーに戻った鎧が言う。
鎧はゴーカイスピアでギムトを攻める。

タトバコンボの武器はトラクロー。ゴーカイスピアのほうがクローよりリーチが長い。クローの届かない距離から鎧はゴーカイスピアで攻める。

「これでは苦しいか」

ギムトはスピアを受けとめ、離れる。メダルホルダーから銀色のメダルを抜き出し、それをベルトのメダルと交換した。

「こいつはどうする」

ギムトはベルトのメダルをスキャンした。

『サイ・ゴリラ・ゾウ！サゴーズ・サゴーズ！！』

銀色のボディ。サイの角を持つ赤い目の仮面。ゴリラのごとき重厚な腕。ゾウのように屈強な脚。

オースの重量系コンボ。サゴーズコンボだ。

「こいつで潰してやる」

「潰されません！」

鎧はゴークイスピアでサゴーズコンボに挑んだ。これから思い知るサゴーズの恐ろしさを知らずに。

強力なティラノヤミーの攻撃でジョー達は苦戦を強いられていた。

「バース、ゴークイジャー破壊する！」

「さっきから同じことばかり言って……！」

ルカがサーベルダガーを投げる。ダガーは命中するが、ティラノヤミーの体に弾かれた。

「固すぎ！うわ！」

ルカの横から力ザリが爪で攻撃する。

「君は油断しすぎだ」

そのまま力ザリは爪でルカを切り裂こうとする。ルカは防戦一方だ。

「ヤバイヤバイ、なんか変えよう！」
「なら、スペシャルにしましょう」

アイムは普段マーベラスが使う赤いキーを出す。ルカはそれでアイムの言葉の意味を理解した。

「なるほど。レッドスペシャルね！」
「面白い！」

ジョーも赤いキーを選んだ。

「じゃあ僕も！」

ハカセとルカが赤いキーを取る。皆、赤だ。

「ゴーカイチェンジ！」

『シンケンジャー！』

ジョーは赤い侍、シンケンレッド。

『タイムレンジャー！』

ルカは未来の時間から力をもらった戦士、タイムレッドに。

『ゴーオンジャー！』

炎神の頼もしい相棒、ゴーオンレッドにハカセは変身した。

『アバレンジャー！』

恐竜とは別の進化を遂げた生物、爆竜の力を持つ戦士、アバレッド。それがアームの変身した戦士だ。

「おお、皆赤いな。じゃあ俺もちよつとスペシャルにやってみるか」

伊達はセルメダルをどんどんベルトに入れてハンドルを回す。

『ドリルアーム！クレーンアーム！シャベルアーム！キャタピラレッグ！カッターウイング！ブレストキャノン！』

伊達はバースに備わる全ての装備を身につけた。これがバースの最強形態、バース・デイだ。

「まっかつかだ〜」

「そうね、ガメル」

メズールはガメルの純粋な反応に答えてやった。

「ふん。色を変えたところで！」

「ゴーカイジャー、バース、破壊する！」

ティラノヤミーが突撃する。

「あの化け物は俺が相手をする。他は任せた」
「俺も行くぜ！」

ジョーと伊達はティラノヤミーに向かう。

他の3人はそれぞれグリードの相手をする。

「ダブルベクター！」

ルカは長剣スパークベクター、短剣アローベクターの二刀流でカザリを攻撃する。2振りの刃にカザリは押され始めた。

「バカな、姿が変わっただけで」

「気分が変わったからかな。はっ！」

「ロードサーベル！」

道路を思わせるデザインロードの剣、ロードサーベルをハカセはメズールにがむしゃらに振る。

「なんて乱暴な攻撃……返ってやりづらい」

「はっ！せやつ！」

ハカセはこの攻め方がいいと判断した。ただただがむしゃらに攻めていく。

「ティラノロッド！はあ！」

アイムはティラノザウルスのような顔を先端に持つティラノロッドでガメルを叩いていく。

「うっ、このお！」

ガメルはがむしゃらに拳を振り回す。アイムはそれを華麗にかわし、的確に隙を突く。

アイムは戦いを有利に進めていた。

「ゴークイジャー、バース、破壊だ！」

「壊せるものなら壊してみろ！」

ジヨーはティラノヤミーにシンケン丸で斬りかかる。しかし、ティラノヤミーの鋼のような皮膚はシンケン丸でも斬れなかった。

「効かない！」

ティラノヤミーはジヨーに頭突きを食らわす。バランスを崩したジヨーを爪で攻撃していくティラノヤミー。

「好きにはさせないぜ！」

伊達はドリルを突き出してキャタピラでティラノヤミーに突撃した。ドリルの威力にティラノヤミーは吹き飛ぶ。

「助かった」

「いいってことよ」

ティラノヤミーは立ち上がり、火炎を吐こうとした。しかし里中がティラノヤミーに追撃、動きを止める。

「今のうちだな」

ジョーは『双』という字が書かれたディスクを取り出す。これはかつてもうひとりのシンケンレッドである志葉薫の部下、丹波から承ったものだ。シンケン丸の顎にそれをつけ、回す。するとシンケン丸は二刀の烈火大斬刀に変化した。同じものを2つにする力。それが双のディスクの力だ。

「はあ！」

烈火大斬刀は一本だけでも振るうのが困難な大刀だ。それをジョーは二刀持つ。二つの烈火大斬刀をティラノヤミーに振り下ろした。

「ぐおお！？」

二刀の刃がティラノヤミーの体に深く刺さる。

そこからは戦士達は怒涛の攻撃を繰り出した。

「ベクターエンド・ビート3！」

ルカはスパークベクターを上へ、アローベクターを左へ構え、時計の3時を描く。それぞれの剣を交差させ、カザリを切り裂いた。

「ぐああ！」

「サーベルストレート！」

ハカセは光の道を駆け抜け、一気にロードサーベルでメスールを切り抜ける。

「きゃああ!?!」

「ティラノロッド・サークルムーン!」

アイムはティラノロッドで丸い月を描く。そのエネルギーをガメルにぶつける。ガメルにぶつかったエネルギーは見事に爆発した。

「うわあ!?!?」

「モウギユウバズーカ!」

『セルバースト!』

ジョーは牛の形をしたバズーカ、モウギユウバズーカを手にする。伊達はプレストキャノンにエネルギーを集中した。

「外道覆滅!」

「プレストキャノン、シュート!」

モウギユウバズーカから凄まじいエネルギー弾が、プレストキャノンから強力なビームが放たれる。

2つの攻撃をティラノヤミーはまともに受けた。

「ゴークイジャー、バース破壊……!」

その言葉を最後にティラノヤミーは爆発した。一枚のセルメダルと成る。

「さすがはスーパー戦隊。と言ったところでしょうか」

真木は独り言のように呟いた。自らのヤミーが倒されたことに興味が無いようだ。

「あなたがいなければ地球は既に侵略者に奪われていました。私がかうして動くことも無かったでしょうからね」

「そこまで言うならさっさと負けを認めてもらおうか」

ゴーカイブルーに戻ったジョーはゴーカイサーベルを真木に向けて言う。

「ええ、今回は私たちの負けです。しかし……」

真木はなにやら思案する様子を見せた。そして言った。

「オーズの力だけは破壊させてもらいますよ」

「何？どういう意味だ、ドクター！」

真木が伊達の質問に答えることは無かった。カザリが起こした風にまぎれ、他のグリードとともに姿を消した。

「逃げられたか」

「だが、気になることを言っていたな」

「マーベラスさん達のもとに急ぎましょう」

「ああ」

アイムの提案にジョーもうなづく。マーベラスが負けとは思いたくないが……。ゴーカイジャーはマーベラス達のもとに走った。

レッドレーサーに変身したマーベラスは急いでいた。鎧の实力は信賴しているがギムトは強力なライバルキーを所持している。鎧でも危険なのは既に証明されている。自分が来るまでにギムトが到着していないことをマーベラスは期待した。

だが、現実にはマーベラスの期待通りにはいかなかった。鎧はギムトによって叩きのめされていた。

「鎧！」

マーベラスがつくころには鎧はぼろぼろだった。

「マーベラス……さん」

マーベラスは鎧の前に立ち、フェンダーソードで武装した。

「少し早かったね、マーベラス君。もう少しで彼の頭を潰せたのだが」

ギムトは残念そうに言った。

「ギムト……」

「気をつけてください、マーベラスさん。今あいつはオーズの力を使っています」

「オーズ？」

マーベラスは今のギムトの姿をよく見てみる。確かにベルトはオーズがつけていたものと同じ。だが体は白くなっている。

「ずいぶん白くなったもんだな」

「そいつはサゴーズコンボだ。パワーに優れ、重力を操ることができる」

アंकは簡単にサゴーズの能力を解説した。

「俺もそれにやられて……」

「鎧……」

倒れた鎧をマーベラスは持ち上げる。

「後は任せろ」

「マーベラスさん……！？」

マーベラスは鎧を映司達のほうに投げた。
アंकと映司がちゃんとキャッチした。

「鎧を頼む！」

「マーベラスさん、サゴーズは足が遅い！」

「それに重力は一定箇所しか操れない。スピードか数で翻弄しろ！」

「数で翻弄だと？1人では無理な話だ！」

ギムトはマーベラスに走る。拳を振り回し、マーベラスを潰そうとする。

マーベラスはフェンダーソードをギムトに振るう。しかし、ギムトは右手で受けとめ、左手で殴る。

「固いな」

「くくく……まずは君の足を壊す。そして動けない君を助けに来た

仲間を君の前で壊すことにするよ」

「そうはさせるか！」

マーベラスはキックで距離を離す。

「ゴークイチェンジ！」

『カクレンジャー！』

マーベラスはニンジャレッドに変身した。

「分け身の術！」

マーベラスは8体に分身した。

「マーベラスさんが増えた！」

「ガタキリバほどじゃないが……サゴーズには有効だ」
「行くぜ！」

マーベラスは8体でギムトの周囲を囲む。

「ちっ、どれが本物だ」

ギムトは本物がわからず混乱した。

「食らえ！」

8体のニンジャレッドが手裏剣を放つ。サゴーズの防御力があるとはいえ、ギムトもノーダメージではない。確実に傷ついている。

「くそ！」

ギムトはゴリラのドラミングのように胸を叩きまくる。すると一体のニンジャレッドが浮かび、地面に叩きつけられた。そのニンジャレッドは消滅した。

「残念だが、そいつは分身だ！」

残った7体のうち、3体がカクレイザーでギムトを撃つ。さらに3体が刀のカクレ丸でギムトを斬る。最後の1人が赤い巨大手裏剣、レッドスライサーをギムトに投げた。

「ぬおお！」

ギムトは防御できなかった。ニンジャレッドの攻撃で体の動きが鈍ったこと。それに加えてレッドスライサーが早かったことが原因だ。レッドスライサーはギムトを切り裂いて、ニンジャレッドの手に戻った。

「どうだギムト！」

「舐めるなよ、赤い海賊。オーズの力は……私の欲望はこんなものではない！」

ギムトは新たに黄色いメダルを取り、オーズドライバーに入れる。そのメダルを素早くスキャンした。

『ライオン・トラ・チーター！ラタラタ〜ラトラ〜タ〜！！』

ライオンの鬣。トラの爪。噴射口を持つチーターの足。その全てを併せ持つオーズのラトラーターコンボの頭が輝く。ライオディアス。周囲の全てを焼き尽くす太陽のごとき輝き。ライオディアスの光が

ニンジャレッド達を焼き尽くす。最後に残ったのは一体だけだ。

「お前が本物だ！」

ギムトは襲いかかる。その動きは獲物に食らいかかるライオンそのものと言っている。

チーターの機動力で走り回り、トラクローでマーベラスを切り裂く。余りに早いその動きにマーベラスは反撃できず、ゴーカイレッドに戻ってしまった。

「おい……こいつの弱点は……」

「マーベラスさん、コンボの弱点は……」

アंकが映司の口を抑える。映司は暴れるがアंकは抑えた手を離そうとしない。

「ラトラーターの弱点……強いて言えば攻撃力が低いことだな」
「もっと具体的な弱点をくはっ！」

ギムトはマーベラスの肩を掴み、連続蹴りを放つ。マーベラスは猛攻の前に倒れてしまった。

「どうだ、わかったか。お前と私の力の差が……」

ギムトがマーベラスを見下す。仮面で瞳は見えない。しかし、歪んだ微笑が浮かんでいるだろう。

「所詮お前はアカレッドの部下に過ぎん。やつには遠く及ばん。その程度の力で宇宙最大の宝を目指すなど愚かの極みだ」

ギムトはマーベラスを踏む。

「この宇宙は力が全て。それを私に教えてくれたのはアカレッドだ。お前は学ばなかったのか」

「……ふふ……はははは……」

マーベラスが突然笑いだした。

「マーベラスさん……？」

鎧は心配した。気でも狂ってしまったのか。しかし、マーベラスが笑ったのはそんなことが原因ではなかった。

「違うぜ、ギムト。俺が学んだのは夢を追いかける方法だ」

「夢を追いかける方法だと……？」

「アカレッドは教えてくれた。全ては俺が決められる。全ては俺の意思だと」

マーベラスは立ち上がろうとあがく。

「力があるとか無いとかじゃない。本当に欲しいものがあるならどこまでも追いかける。それが海賊だ！」

マーベラスはギムトを押し退け、立ち上がった。そしてゴーカイサーベルをギムトに向けて言い放つ。

己の決意を。

「ギムト！俺はあんたを倒す。そして必ず宇宙最大の宝を手に入れて見せる！」

「ほざけ！意思の力で埋められぬ差を教えてやる！」

ギムトは一旦離れて走り回る。スピードで攪乱する気だ。

「マーベラスさん、ここはターボレンジャーかタイムレンジャーです！」

鎧がアドバイスを叫ぶ。スピードに優れた相手ならスピードで対抗するのも戦法の一つだ。だが、マーベラスは動かない。ゴーカイレツドのままだ。

「マーベラスさん？どうしてチェンジしないんですか！？」

「きつとマーベラスは勝つ気なんだ。あの姿のままで」

「でもあのスピードじゃ……」

「普通は無理だと思う。でもマーベラスは信じているんだ。自分が必ず勝つことを」

映司はなぜかそう思った。それはマーベラスの先ほどの言葉に強い信念のようなものを感じたからかもしれない。自分が無くした熱い思いを。アंकは少々呆れていた。そんな精神論では勝負に勝てない。勝利のためにはあらゆる手段を用いるべきだ。

「まあいい。後少し持てば……」

アंकは何かを待っているようだ。

ギムトはベルトをスキャンする。

『スキヤニングチャージ！』

ギムトの前方に3つのリングが浮かぶ。その先にはマーベラスの

姿がある。

マーベラスもレンジャーキーをゴーカイサーベルに差した。

『ファイナルウェーブ!』

「私の必殺技とお前の必殺技……どちらが決まるか……」

ギムトは足に力を入れる。

「勝負だ!」

その言葉とともに走り出す。ロケットのように飛び出したギムトは一瞬でリングを通り、マーベラスをクローの範囲に入れた。

「死ね!」

「はああ!」

ギムトがクローをマーベラスに降ろす。マーベラスがゴーカイサーベルを振る。一瞬の交差。
2人の位置は入れ替わった。

「どっちが勝った!?!」

攻撃の瞬間を見たものは誰もいない。だから勝者がわからなかった。しかし、確実にどちらかが攻撃を受けたはず。攻撃を受けたのは……

「バカ……な……」

ギムトの胸に赤い一筋の傷が見える。攻撃を受けたのはギムトであった。

ギムトは膝をつき、倒れた。

マーベラスの勝利だ。

レッドスペシャル（後書き）

今回はついにオーズ復活です。

感想や意見、もうすぐ終了の大いなる力のアイデア。

楽しみにしています。

それではまた。

ヒーロー集合と力の融合と王の復活（前書き）

今回はフラッシュマン、メガレンジャーにチェンジ。そしてついにオーズ復活。ですが、最後にとんでもない事態に……。

カウントザメダル

オーズが取り戻したメダルは。タカ×2 クジャク×1 バッタ×1 ト
ラ×1 チーター×1 シャチ×1 ウナギ×1 サイ×1 ゴリラ×1 ゾウ
×1 プテラ×2 トリケラ×1 テイラノ×2
そしてマーベラスが持つメダルはコンドル×1

ヒーロー集合と力の融合と王の復活

「マーベラスさんの勝ちです!」

鎧は喜んでマーベラスのもとに駆ける。

映司達もついていく。

「すごいです、マーベラスさん。ラトラーターにスピード勝ちするなんて……」

「まあな。と言いたいところだが……」

マーベラスはちゃんと勝てた実感がなかった。必殺技をかける直前、ギムトの動きが鈍ったのだ。だからうまくカウンターを決められたが、なぜギムトの動きが鈍ったのかわからなかった。アंकがその答えの述べる。

「コンボの副作用が出たんだな」

「コンボ?」

「オーズは同種のメダルを使うことでコンボという力が使える。コンボは強力だが体力を消耗する。お前と戦っている間に体力を使いきったんだろ」

「なるほど。だから映司の口を閉じたのか」

映司が時間を稼げとか指示をすれば、ギムトはコンボの弱点に感づく。だからアंकは映司をしゃべらせなかったのだ。

「しかし、俺の体を退けたばかりかコンボの攻撃まで凌ぐとはな。大したやつだ」

アंकは正直マーベラスがここまでやるとは思っていなかった。だから本当に誉めていた。

「へっ。さっさとオーズの力を戻すぞ」

倒れたギムトはもとの姿に戻った。

マーベラスはオーズのレンジャーキーを取り、映司に渡した。メダルホルダーもアंकに渡す。

「映司、キーをドライバーに」

「うん」

映司はレンジャーキーをドライバーに近づける。するとレンジャーキーはドライバーと一体化。ドライバーの石化が解けた。

「やった！オーズの力が戻ってきた！」

「メダルもあるな」

「おお、そうだ。あの赤いやつから取ったメダルがあるんだ。こいつも」

マーベラスはアंक（ロスト）が落としたメダルを取り出した。それを映司に渡そうとする。

その背中に何者かの炎が命中した。マーベラスが倒れる。

「マーベラスさん！」

「誰が……」

映司は見た。ティラノザウルスに似た怪物を。このティラノヤミーがマーベラスを撃ったのだ。真木はティラノヤミーを二体作り、一体を陽動に、もう一体をオーズの力を破壊するために差し向けたの

だ。

「よくもマーベラスを！」

映司の瞳に怒りの炎が宿る。

「アंक！」

「こいつで一氣に決めてやれ！」

マーベラスの持っていたコンドル。自分が持っていたタカとクジャク。映司にそれらのコアメダルを渡す。映司はオーズドライバーにメダルをいれ、スキャンした。

「変身！」

『タカ・クジャク・コンドル！タジャードル〜！！』

フェイスガードが装備され、瞳を赤く染めるタカヘッド。全身を赤で固めたスマートなボディ。

不死鳥が描かれたオーリングサークル。アंकのコアメダルにより変身した鳥系コンボのタジャードルコンボだ。

「オーズ、破壊する！」

ティラノヤミーは炎を吐く。映司は腕を動かし、背中にクジャクの羽のような炎を展開する。それを一氣に放つ。炎は互いに相殺した。そして三対の赤い翼、クジャクウイングを広げ大空に飛び立つ。

左手にサークルより出現したタジャスピナーを装備。スピナーから炎を発射し、ティラノヤミーを攻撃する。

「ぐおお！」

「俺も行きます！ゴーカイチェンジ！」

『ジウレンジャー！』

「ドラゴンレンジャー！」

ジウレンジャーのドラゴンレンジャーに鎧は変身した。

「獣奏剣！」

獣奏剣でティラノヤミーを切り裂く。空中からのオーズの攻撃もあり、ティラノヤミーは反撃できない。

映司はオースキャナーを取り、ベルトをスキャンする。鎧もゴーカイシルバーに戻り、キーをゴーカイスピアにセットする。

『スキヤニングチャージ！』

『ファイナルウェーブ！』

「ゴーカイシユーティングスター！」

鎧は飛び上がり、ゴーカイスピアを投げる。ゴーカイスピアは流星のごときスピードで飛んでいく。

「セイヤアア！！」

映司は足を変形させ、鳥の爪の形に変える。その爪の先に炎を纏い、襲いかかる。タジャドルコンボの必殺技、プロミネンスドロップだ。

シユーティングスターで貫かれたティラノヤミーにプロミネンスドロップが炸裂する。ティラノヤミーは爆発し、1枚のセルメダルと化した。

「やりましたね」

「うん」

見るとマーベラスも立ち上がっていた。鎧と映司はマーベラスのもとに歩む。

後はギムトからライバルキーを奪えば終わりだ。

「そういえばギムトは……」

マーベラスが気づくとギムトの姿が消えていた。

「あいつ、逃げたのか」

その時、マーベラス達のもとにビームが降り注ぐ。映司が上空を見ると宇宙船があった。

「こいつでめえらを殺してやる！」

それはギムトの宇宙船だった。宇宙船は次々にビームを撃ってくる。

「映司、さつさとあいつを撃ち落とせ！」

「わかってる！」

映司はクジャクウイングで空を飛び、タジャスピナーを撃とうとした。だが、宇宙船のビーム攻撃が激しく、狙いをつけられない。

映司は避けるのに精一杯だ。

「あの野郎……」

「マーベラス！」

ジョー、ルカ、ハカセ、アイム、伊達が駆けつけた。里中は休憩時間が来たと言って帰ってしまった。伊達は気にせず、クールだねえと片付けた。

駆けつけた5人にマーベラスは多くを言わず、指示を出した。

「あいつを撃ち落とすぞ」
「なら、これにしようよ」

ハカセが取り出したのはフラッシュマンのキーだ。
マーベラスもそれに賛成し、キーを取り出した。

「ゴークイチェンジ！」
『フラッシュマン！』

鎧を除く5人は超新星フラッシュマンにチェンジした。

「ローリングバルカンだ」

5人はそれぞれが持つバルカン砲の銃身を合体、ローリングバルカンが完成する。

「ルカ、サーチだ」
「OK！」

イエローフラッシュとなったルカは目標のギムトの宇宙船を補足した。今も宇宙船はオーズの相手をしていてこちらに気づいていない。チャンスと言えた。

「ローリングバルカン！」

レッドフラッシュとなったマーベラスの指示を受け、ローリングバルカンが発射される。

バルカンから赤、青、黄色、緑、桃、5色の光線が発射され、ギムトの宇宙船を破壊した。

映司は地上に着地する。マーベラス達はゴーカイジャーに戻った。

「火野、オーズの力を取り戻せたのか」

「はい、マーベラスさん達のお陰で」

「そうか。とりあえず良かったな」

そう言いながら、伊達は本当に良かったのかと思った。映司がオーズの力を取り戻す。それは映司が体内に秘めた紫のメダルにより暴走する可能性が蘇ったということだ。だから伊達は手放しに喜ぶことができなかった。今では友人と言える男が化け物になることを喜べるはずが無かった。

「貴様ら、よくも私の宇宙船を！」

ギムトが炎上した宇宙船から現れた。 マーベラスはそのしぐさに呆れはじめていた。

「お前、しつこいにも程があるぞ」

「黙れ！私の宇宙船を壊した罪は貴様らの命で償ってもらおう」

ギムトはサーベルとガトリングで武装した。

マーベラス達は気合いを入れ直すため、名乗りを行った。

「ゴーカイレッド！」

「ゴーカイブルー！」

「ゴーカイエロー！」

「ゴーカイグリーン！」

「ゴーカイピンク！」

「ゴオオオオオオカイシルバー！」

「仮面ライダーオーズ！」「仮面ライダーバース！」

「海賊戦隊！」『ゴーカイジャー with 仮面ライダー！』

今、8人の正義の戦士が集結した。

8人はそれぞれの武器を手にギムトに挑む。

ゴーカイジャーのサーベルが、ゴーカイシルバーのスパアがギムトを斬る。オーズとバースのキックが、ギムトを弾きとばす。ギムトは早速ピンチだった。

「どうしたギムト！大したことねえな！」

元々ギムトの实力はアカレッドより下。アカレッドに勝るとも劣らぬ戦士が8人で戦っているのだ。ギムトに勝ち目があるはずがない。だが、ギムトにはまだライバルキーがある。ギムトはキーを取り、モバイクロスに差す。

『ユガンデ！』

ギムトは緑色の怪人、ユガンデに変身した。メガレンジャーと戦った誇り高き戦士だ。

ダーククライシスという剣についた青いボタンをギムトは押す。

「ダークライトニング！」

ダーククライシスから電撃が発射され、ゴーカイジャーを襲う。ゴ

ーカイジャーは吹き飛ぶ。

「皆さん、メガレンジャーになりましたよう！」

鎧の提案に皆は賛同し、メガレンジャーのキーを取り出した。

「ゴーカイエンジン！」

『メガレンジャー！』

今度はシルバーも含め、電磁戦隊メガレンジャーに変身した。

「ドリルセイバー！」

メガレッドに変身したマーベラスはドリルのついた剣、ドリルセイバーを持つ。ドリルセイバーでギムトを突く。ギムトはダーククライシスでドリルセイバーを切り払う。

「メガスリング！」

「メガキャプチャー！」

マーベラスが下がる。同時にメガイエローとなったルカが、パチンコ型のメガスリング。メガピンクとなったアイムがパラボラアンテナのようなメガキャプチャーで攻撃。光弾と超音波がギムトを襲う。

「メガトマホーク！」

「メガロッド！」

メガブルーとなったジョーは回転しながらトマホークでギムトを斬る。さらにハカセがロッドで突く。

「おのれ！ダークブレイド！」

ギムトはダーククライシスの黄色のボタンに触れる。ダーククライシスから強力な斬撃が放たれ、ジョーとハカセを切り裂く。

メガシルバーに変身した鎧はシルバーブレイザーを銃モードに変形。シルバーブレイザーを撃ちながら接近する。激しい連射に怯むギムトに接近、シルバーブレイザーを剣に変える。

「ブレイザーインパクト！」

鎧はシルバーブレイザーを一閃。ギムトは大ダメージを受ける。

「ドリルスナイパーカスタム！」

「マルチアタックライフル！」

マーベラスはさらに追撃。ドリルセイバーをメガスナイパーにセットしたドリルスナイパーカスタムをマーベラスは持つ。

ハカセはメガロッド、メガトマホーク、メガスリング、メガキャプチャーを合体させたマルチアタックライフルを装備。

2つの銃から必殺光線が発射され、ギムトに炸裂する。

「こいつで終わりだな」

マーベラスはもう戦いは終わったと思った。自然とゴークイレッドに戻る。他のゴークイジャーも同じだ。

『サラマンデス！』

爆炎の中から音声が響く。炎の中から赤き龍王子、サラマンデスが

姿を表す。

「なんだと！まだ倒れねえのか！」

「俺は二度も敗れぬ。暗黒をさ迷うのは貴様達だ！」

サラマンデスと化したギムトは炎を放つ。

映司が前に出て、タジャスピナーで受けた。

「こいつで消し飛ばしてやる」

ギムトは空中に飛び、巨大な炎の塊を生み出した。

「消されるのはお前のほうだ」

鎧は15体の追加戦士のキーを取りだし、全て融合させた。

そして出現した錨の形をしたゴールドアンカーキー。それをモバイセルラーの下部にセットする。

『ゴーカイシルバー、ゴオオオオオオオオオールドモオオオオド！
！』

叫ぶような音声が響き、鎧の上空に黄金の錨が出現。鎧のもとに降りるとそれは鎧となった。鎧には15戦士のマスクがついている。そしてゴーカイスピアの刃が反転、錨の形のアンカーモードになる。これが15戦士の力を持つゴーカイシルバーの最強形態。

「ゴーカイシルバー、ゴールドモード！」

15戦士のキーが融合したことにギムトは驚いた。そしてある可能性を考える。だが、今重要なのは8人の抹殺だ。ギムトはエネルギー

―球を発射した。

「死ね！」

「させない！」

映司は空中に飛び立ち、タジャスピナーをスキャンする。

『タカ・クジャク・コンドル！ギンギンギン！ギガスキャンー！！』

映司の全身が炎に包まれる。

伊達はセルメダルをベルトに入れ、ハンドルを回す。

『ブレストキャノン！』

続けてセルメダルを入れて、チャージした。

『セルバースト！』

『ブレストキャノン発射！』

伊達は貯まったメダルを一気に放つ。

炎を纏う映司はキャノンのエネルギーとともに突撃した。

「セイヤアアア！！」

映司はエネルギー球と激突。エネルギー球を破り、ギムトを貫いた。

「バカな！」

「まだまだ行きますよ！」『ファイナルウェーブ！』

鎧がゴーカイスピアにキーを差す。戦隊を表すエンブレムとともに15戦士のマスクが空中に現れる。鎧はゴーカイスピアにそのマスクを集めた。

ゴーカイスピアの刃が青く輝き、鎧の周りに7人の戦士が出現する。メガシルバー、ガオシルバー、マジシャイン、ボウケンシルバー、ゴーオンゴールド、ゴーオンシルバー、ゴセイナイト。

『ゴーカイレジェンドリーム!』

彼らとともにゴーカイスピアの先からビームを放つ。

8つのビームは8人の戦士に変化。

ドラゴンレンジャー、キバレンジャー、キングレンジャー、タイムファイヤー、シュリケンジャー、アバレキラ、デカブレイク、シンケンゴールド。

8人の戦士は飛び立ち、次々にギムトを切り裂く。最後に鎧自身がゴーカイスピアでギムトを切り抜けた。

「ま、まだ……」

「ああ、まだまだだ!」

『ファイナルウェーブ!』

鎧を除く5人もエネルギーチャージを完了していた。

「ゴーカイブラスト!」

ゴーカイガンから必殺の弾丸を発射。

「ゴーカイスラッシュ!」

続いてゴークサイバーベルから光の刃を放つ。5色の刃は同色の弾丸を加速させ、ギムトに命中した。

ギムトが大爆発を起こす。これだけの攻撃を受けたのだ。自分達の最強の攻撃を。だから、ギムトが完全に消え去ったと皆は思った。

「ぐああ！」

サラマンデスの変身が解けたギムトが地面に落ちる。ギムトはまだ生きていた。あれだけの攻撃を食らったにも関わらず……ぼろぼろではあるが五体のどこも失っていない。あまりの不死身ぶりにさすがにマーベラスもたじろぐ。

「何こいつ……ジエラシット並？」

動揺のあまり、ハカセは地球人と駆け落ちしていたザンギヤックを思い出した。だが、あちらよりこちらが遥かにヤバイ。こいつの不死身さは不気味だ。

「まだだ。まだ俺は死なん！」

ギムトはバツクルから全てのキーを取り出した。それを……1つにした。

「あいつ、キーを1つに……」

「お前達にやれたのだ。俺にできないはずがない」

キーの形は黒い十字架を模したものだ。そのキーをモバイクロスに差して、回した。

『黒十字王!』

モバイクロスが叫んだ名前はこの場の誰もが知る最悪の名前だった。

「な、なんだと!?!」

モバイクロスから闇が溢れる。その闇がギムトを飲み込んだ。

「なんだこれはあ!?!」

ギムトは闇から逃れようと動く。だが、空から隙間から様々な場所から闇は飛んでくる。

「うああ!! 助けてくれえ!!?!?!」

ギムトが苦しみの叫びをあげる。映司は思わず手を伸ばすが、マーベラスが止めた。

「よせ。闇に取り込まれるぞ!」

「でも……」

映司はギムトを助けようとした。だが、マーベラスだけでなくアンクも止めた。

「もう遅い」

やがてギムトの叫びが消えた。混沌としていた闇が1つの形になる。人間の体に黒い十字架のような巨大な頭がついた姿。闇が晴れ、そ

れは完全なる姿を見せた。

「黒十字王、復活!!」

地球最悪の悪魔、黒十字王が復活した。

ヒーロー集合と力の融合と王の復活（後書き）

黒十字王が復活してしまいました。

リバスオブブラッククロスのタイトルから予想されていた方も多いのではないのでしょうか。完全復活ではありませんが、黒十字王です。かなり強いですよ。次回を楽しみにしてください。

オーズは最終回を迎えました。ですがこの小説はもう少し続きます。最後まで頑張りますよ。感想、意見お待ちしています。

ちなみに私の最終回の感想は活動報告に書いておきました。よければそちらをご覧ください

リバース・オブ・ブラッククロス（前書き）

ついに復活した黒十字王との戦いです。

ゴークイジャー、オーズ、バースの激しい戦いをご覧ください。

注意：ゴレンジャー最終回のネタバレが少し含まれています。
見てない人は気をつけてください。

リバース・オブ・ブラッククロス

黒十字王は復活を遂げた。マーベラス達の目前でギムトの体を使い、復活したのだ。

「そんな、こいつはマーベラスさん達が倒したはずじゃ……」

「ああ、間違いない。やつは俺たちが倒した」

ゴークアイジャーの地球を守る意思に疑念を持っていたゴセイジャーは、自分達のレンジャーキーをゴークアイジャーから奪った。

ゴークアイジャーとゴセイジャー、戦隊同士によるレンジャーキーの争奪戦。

その場に割り込んだきたのが黒十字王だった。

ゴークアイジャーとゴセイジャーは協力し、力を合わせて黒十字王を倒した。

その後、ゴセイジャーはレンジャーキーをゴークアイジャーに返還。二度と黒十字王は現れないはずだった。

「驚いたか、海賊ども。ライダーども。だが、私は幽霊ではない。実体を持った存在としてここに立っている」

そんなことは言われずともわかってる。体からにじみ出る邪悪さと憎悪、35年分の恨み。こんなものを出せるのは黒十字王本人以外に無いだろう。

「黒十字王、ギムトはどうした」

「見てわからなかったか。やつは私の体になった。予定通りにな」

「予定通り……？」

「そうだ。私はスーパー戦隊への強い憎悪を感じ、やつと出会った。そして我が分身たる悪の戦士達をライバルキーに変え、やつに渡した」

「何のためにそんなことを……」

「万が一お前達海賊どもに倒された時のためだ。そのために我が内に眠る悪の科学者達にやつを改造させたのだ」

ギムトの異様なしぶとさ。それは悪の科学者達に改造されたためだったのだ。黒十字王の新たな体にするために。

「やつが中々ライバルキーを合体させてくれなくて少しヒヤヒヤしたがね。ライバルキーを合体させる前にやつが死ねば、私も復活できないからな」

「お前は最初からやつを利用する気だったのか!？」

黒十字王の計画に怒りを感じ、映司が叫んだ。しかし、黒十字王に気にするそぶりは見られない。

「利用する? 奴も私の力を利用し、全宇宙の宝を手にする気だった。そんな宇宙の屑でもこうして私の復活に役立ったのだ。やつには感謝してもらいたいぐらいだ」

宇宙の屑。黒十字王にとってギムトは自分のスペアボディ以外の何者でもなかった。

「許せない、お前は!」

「仮面ライダー。お前も力の源を奪われ、やつに苦しめられていたではないか。なぜそんな屑の死に怒る」

「確かに屑だったかもしれない。それでも仲間を利用するだけ利用して切り捨てるなんて、許されない!」

映司は一瞬アंकを見た。アंकの表情は特に変わらない。メズールは言った。アंकに裏切られないように気をつけろと。アंकと自分はメダルの関係だ。その事は分かっている。それでもアंकとは戦いたくなかった。できれば……せめて自分と比奈は裏切らないで欲しい。今のセリフはアंकに対する警告と同時に願いだった。

「黒十字王。確かにギムトは宇宙の屑だ。だが、てめえのやり方はもつと最悪だ！」

仲間を裏切る。かつて親友とも思えたバスコに裏切られたマーベラスにとつて裏切りとは許しがたい行為だ。ギムトも黒十字王のことは信じていなかっただろう。だからといって、人の命を利用する理由にはならないはずだ。

「正義感か、海賊ども、ライダーども！だが、許さないのは私も同じだ！35年に渡る恨み、今ここで晴らしてくれ！」

黒十字王の体から4体の闇が飛び出す。闇は悪の戦士へ形を変えた。

「ダークナイト！」「龍皇子サラマンデス！」「デュークオルグ、狼鬼！」「クエスターガレイ！」

4体の悪の戦士が黒十字王により復活した。

「行け、悪の戦士達よ！海賊どもと仮面ライダーどもを血祭りにあげろ！」

「おお！つてお待ちください、黒十字王様！」

クエスターガレイが黒十字王に文句を言った。ガレイは1つの口から2つの声で喋る。ガレイはクエスターガイ、クエスターレイの合体怪人である。故に1つの体に2つの心を有しているのだ。

『私とガイがくつついたままです！』

「こんなんで戦えって言うんですか！」

「いいじゃないか。強そうだし」

「強そう？本当に」

3人の悪の戦士は頷いた。ならいいかとガレイも納得した。

「気を取り直して……悪の戦士達よ！海賊どもと仮面ライダーどもを血祭りにあげろ！」

今度こそ悪の戦士達は飛び出す。マーベラス達も一気に駆け出す。

「俺は黒十字王を潰す！」「俺も行きます！」

マーベラスと映司は黒十字王に向かった。

「勝負だ、青き海賊よ！」「いいだろう！ハカセ！」

ハカセからサーベルを受け取り、ジョーはダークナイトに応えた。

「長年の恨み、晴らしてくれる！」

「来た！」「恨み恨みと、暗いことだねえ」

ハカセと伊達の緑のコンビに狼鬼が襲いかかる。

「女が相手か。たやすく片がつきそうだ」

「女だからって甘くみないでよね」

「火傷しますよ」

ルカとアイムの女の子コンビに竜王子は炎を放つ。

「やれやれ。俺達の相手は1人かよ」

『私たちは2人で1人のクエスター。1人で勝てるか』

「勝ってみせます！それにいつだって6人力です！」

ガレイの強力さを知りながら、あえて鎧は1人で挑む。

「思い知らせてくれる。私のスーパー戦隊への恨みの強さを！」

黒十字王は目から赤いビームを放つ。マーベラスと映司はかわしたが、ビームはビルに命中。一撃でビルを破壊した。その威力にマーベラスが目を見張る。

「ヤバいな。さっさと倒すぞ」

「はい！」

映司は了承した。どのみちタジャドルコンボでいられる時間はそう長くはない。一撃でけりをつけなくてはならない。

マーベラスはゴーカイガン、映司はタジャスピナーを連射。黒十字王が両手についた剣で防御している間に接近する。

「ダークナイト、闇の舞！」

ジョーの周りが暗闇に包まれる。闇の舞の力だ。ダークナイトの笑い声が闇にこだまし、闇の中で剣が回る。ジョーは動かない。動かずに精神を集中する。必ずダークナイトは攻撃してくる。ジョーを倒すために。その時が勝負だ。やがて闇が動いた。

「ダークネスハリケーン！」「そこだ！」

ダークナイトが突きを繰り出す。それに合わせ、ジョーも突きを出した。互いの刃は互いにダメージを与えた。

「くっ！私が攻撃するタイミングを狙うとはな！やるではないか！」
「お前こそ、ただの卑怯者ではないようだな」

ジョーは一気に仕留めるつもりだった。だが、思っていたよりダークナイトの突きは早く鋭かった。おかげで突きを食らい、第二撃を繰り出せなかった。これは時間がかかるかもしれない。ジョーは長期戦を覚悟した。

「どうしたどうした！」

ハカセと伊達は苦戦を強いられていた。狼鬼のスピードが早く、中々攻撃を命中させられないのだ。

「ちょこまか動いて……！」

ハカセはジョーからもらった分も合わせて二丁のゴーカイガン撃つ。狼鬼は狼のように動き回り、弾をかわす。そして三日月剣でハカセと伊達を切り裂く。

『シャベルアーム！』

伊達はシャベルアームを装備して反撃しようとした。だが、やはり狼鬼のスピードに対抗できない。基本的にバースの武器は威力を重視して作られている。だからこういったスピードの早い敵には対応できないのだ。せめて足を止められれば。伊達とハカセはなんとか勝つ手段を考えていた。

サラマンデスにルカとアームはゴーカイガンを乱れ撃つ。だが、サラマンデスは弾が効いていないのか、二又の槍を持って走る。サラマンデスは槍をルカとアームに振るう。2人は避けながら武器を交換。ルカはシャベルの二刀流で二又の槍を抑え、そこをアームが撃つ。サラマンデスは片腕から火炎弾を発射しアームに命中させる。

「アーム!」「隙ありだ」

サラマンデスはシャベルを弾くと槍でルカを斬る。倒れたルカのもとにアームが駆け寄る。サラマンデスは炎を2人に向かって放った。2人は炎の熱で苦しむ。

「ふはは!燃えろ!焼け死ぬがいい!」

鎧はガレイの弾から逃げていた。ガレイは猛スピードで両手に持つグレイバーストを撃ちまくる。

「逃げろ、逃げろ!」

『地獄の底までな!』

このまま逃げていると拉致があかない。鎧は再びゴールドアンカーキーを使うことを決めた。モバイセルラーにゴールドアンカーキーを差す。

「ゴーカイルバー、ゴールドモード！」

一瞬で鎧は15戦士の鎧を纏った。

「なんだその趣味の悪い鎧は！」

「悪くありません！このかつこよさがわからないとはクエスターも大したことありませんね」

「てめえ……おい、レイ！お前も何か言ってやれ！」

『それよりやつの鎧をよく見る、ガイ。高岡の末裔が使ったマスクがあるぞ』

「なんだと」

ガイは良く見てみた。確かに高岡の末裔が使ったボウケンシルバーのマスクがあった。かつての敵を見たガイはますます怒りをたぎらせる。

「ああ、イライラするぜ。俺様達を殺したあの高岡のマスク……許せねえ！」

ガレイはガイの怒りによりますますグレイバーストの連射速度を高める。防御力を高めて鎧はガレイをねじ伏せる気だった。だが、ガレイの怒りの連射に結局苦戦することになった。

「ええ！？作戦失敗！！？」

マーベラスと映司は黒十字王にサーベルと拳を放つ。黒十字王は両手でその攻撃を受けとめた。

「なんだと!」

「私を舐めるな!」

黒十字王は映司とマーベラスを腕についた剣で切り裂く。映司とマーベラスは地を転がる。

「まだまだ!」

マーベラスは再び黒十字王に切り込んでいく。マーベラスが黒十字王を抑えている間に映司は空を飛んだ。空中でコアメダルをタジャスピナーにセットし、スキャンした。

『タカ・クジャク・コンドル!ギン・ギン・ギン!ギガスキャン!』
「セイヤアア!!」

全身に炎を纏い、映司は黒十字王に突撃する。マーベラスをいなし、黒十字王はそれに気づいた。

「はっ!」

黒十字王は目から光線を放つ。映司は無理やり光線を突き破ろうとした。だが、光線に押され、炎を破られた。そのまま光線は映司に命中し、映司を撃墜した。映司は地面に落ちていく。

「そんな……コンボの必殺技が……」

映司は倒れる。しかもオーズの変身が解けてしまった。コンボの長

時間の使用で体力が限界を迎えたのだ。

「映司！」

「スパー戦隊を信じる愚か者よ。一思いに殺してやろう！」

黒十字王は映司にとどめをさそうと目にエネルギーを集中する。

「させるか！」

マーベラスは黒十字王の側面から斬りかかる。黒十字王は右手の剣で攻撃を受ける。

「邪魔をするな！」

黒十字王は左手の剣でマーベラスを斬る。

マーベラスはすぐに立ち上がり、ゴークイガンで黒十字王の腹に近づけた。

「食らえ！」

マーベラスはほぼゼロ距離でゴークイガンを連射した。爆発が起き、マーベラスと黒十字王が吹き飛ぶ。ゼロ距離での連射は威力が強すぎたのだ。

「くっ……こんなバカな真似をするとは。貴様、命が惜しくないのか」

「命を惜しむのなら海賊なんてやってないぜ！」

マーベラスは立ち上がる。何度も何度も。

「おい、映司！起きろ！何寝てる、さつさと起きろ！」

アंकは何度も映司の体を揺する。映司はやっと目覚めた。

「アंक……マーベラスさん！」

映司の目には黒十字王に危機に追い込まれているマーベラスの姿があった。助けなければならない。映司は体内から紫のメダルを取り出した。

「よせ、映司！紫のメダルは危険だ！」

「大丈夫。一回制御できたんだから……」

「だからって安易に使うな。また暴走するかもしれないんだぞ！」

アंकは必死に映司を止める。紫のメダルは余りに強く、暴走の可能性を秘めている。最悪、映司がグリード化するかもしれないのだ。そうなれば映司はアंकや周囲の人々を傷つけるようになるかもしれない。だからアंकは映司を止める。自分が生き延びるためにも

……

「アंक、お前も見ただろ。ただのコンボじゃ黒十字王には勝てない。それに……」

映司は周囲を見渡す。

ジョーはダークナイトの剣を受けながらも果敢に戦っている。

伊達が狼鬼の足を止め、ハカセが狼鬼を撃つ。

アイムのゴーカイガンが火を吹き、ルカがワイヤーで変幻自在の剣舞を見せる。サラマンデスはその攻撃に膝をついた。

ガレイのグレイバーストの猛撃を受けながら鎧は突き進む。ゴーカイスピアの刃が煌めき、ガレイの装甲を切り裂く。そして何度倒れ

ようとマーベラスは黒十字王に食らいつく。

皆、必死に戦っていた。

映司はかつて友達を助けられなかった。だから人に手を伸ばすようになった。目前で人が死ぬのは二度とごめんだった。もう誰にも死んでほしくない。今ならできるのだ。どこまででも手を伸ばせる。オースの力があれば……。

「俺はあの人達を助きたい。俺や皆を守るために必死に戦うあの人達を俺が助きたいんだ！」

アंकはもう何を言っても映司は止められないと思った。筋金入りのバカは理屈では動かない。己の意思にのみ従うのだ。

「好きにしる。だが、暴走はすんな！あいつらに死なれなくなかったな！」

「ああ、わかってる！」

映司は紫のメダルをベルトに装填、オースキャナーでスキャンする。

「変身！」

『プテラ・トリケラ・ティラノ！プ・ト・ティラノザウルス！』

映司の前方に現れた紋章が合体し、映司の胸につく。それとともに映司の姿が変わる。

ボディの色は紫。プテラノドンを思わせる形をした仮面。肩についた金色のトゲ。背中には翼のようなバインダー。腰にも尻尾のようなバインダーがついている。

オース最大の力を持つ紫のメダルのコンボ、プトティラコンボだ。

「うおおおお！」

映司が叫ぶとアंकはジャンプして離れる。映司の足元が凍る。氷は周囲に広がっていく。それに気づいたマーベラスは黒十字王を蹴飛ばして離れる。黒十字王は氷付けになるが、すぐに氷は割れた。しかし、黒十字王はオーズに脅威を感じ取った。

「貴様、その力は一体……」

「行くぞ、黒十字王！」

映司は地面に手を突っ込む。そこからティラノザウルスの意匠を持つ斧、メダガブリューを取り出した。映司はメダガブリューを黒十字王に振り下ろす。両手の剣をあわせ、黒十字王は受けとめる。

「俺もいるぜ、黒十字王！」

背後からマーベラスがゴーカイサーベルで黒十字王を斬る。

「くっ、おのれ！」

「映司、派手に行くぜ！」「はい！」

ゴーカイサーベルとメダガブリューの連携に黒十字王は押されている。2人の攻撃を防ぎきれず、黒十字王はどんどん傷ついていった。

「バカな！私がこんなやつらに！」

黒十字王は目から光線を放つ。映司はメダガブリューで光線を受けとめ、切り裂いた。続いてマーベラスがゴーカイガンで黒十字王の体を撃つ。

「映司、とどめだ！」

「はい！」

マーベラスはレンジャーキーをゴーカイガンにセット。映司はセルメダルを刃の部分に入れる。メダガブリューが動き、セルメダルを噛み砕いた。

『ファイナルウェーブ！』 『ゴツクン！』

「ゴーカイブラスト！」

マーベラスはゴーカイガンから必殺のエネルギー弾を発射。

『プ・ト・ティラ〜ノヒツサ〜ツ！！』

映司はメダガブリューをバズーカモードに変形。銃口に発生した紫のエネルギーがゴーカイブラストを押す。紫のエネルギーに押され、赤い銃弾が黒十字王に激突。大爆発を起こした。

「やったか！？」

マーベラスは爆発が起こした結果を見る。

「黒十字カッター！」

頭だけになった黒十字王が煙から飛び出した。高速回転しながら、マーベラスと映司を切り裂く。

「うああ！」

マーベラス達を攻撃した後、黒十字王は体を復活させた。

「紫のメダルでも……ダメだなんて」

「無駄だ！お前達に私は倒せない！」

「マーベラスさん、こうなったらゴレンジャーです！」

「ゴレンジャー！？そうか！」

鎧のアドバイスを受け、マーベラスはゴレンジャーのキーを取る。
鎧を除く他の仲間もキーを取った。

「ゴーカイチェンジ！」

『ゴレンジャー！』

世界初のスーパー戦隊、ゴレンジャーにゴーカイジャーは変わった。
怪人達を追い払い、合流する。黒十字王はかつて自らを倒した戦士
を見て顔を歪める。

「ゴレンジャー。忌々しい姿だ。そいつらさえいなければこの私が
地球を手に入れたというのに……」

「残念だが、誰にもこの星は渡さない。お前らにも、ザンギヤッグ
にもな！アイム、ゴレンジャーハリケーンだ！」「はい！」

モモレンジャーに変身したアイムはアメフトボールの形をした爆弾
を取り出した。かつて黒十字王が黒十字総統だった時、この武器に
破れた。黒十字王の弱点を狙える最強の武器だ。

「ゴレンジャーハリケーン・カシオペア！」

アイムの叫びとともにゴーカイジャーは走り出した。映司、伊達、
鎧もそれに合わせて動く。

「者共、全力で阻止するのだ！」
「おお！」

黒十字王を守るため、怪人軍団も走り出す。

「ハカセさん！」

アイムはミドレンジャーに変身したハカセにハリケーンを投げる。
ハカセはそれを受け取るうとした。

「オーライ！」「させるか！」

狼鬼はアイムとハカセの間に飛び込み、ハリケーンを奪う。

「これで俺たちの勝ちだ！」「そうは床屋が降ろさねえよ！」
『キヤタピラレツグ！』

微妙に間違った言葉を言いながら、伊達はタツクルする。キヤタピラの脚力も加わった強烈な突撃が、狼鬼を吹き飛ばす。狼鬼が放したハリケーンを伊達はゲット。ハカセに投げる。

「受けとりな！」

「よいしょっと。ルカ！」「やらせるかよ！」『こいつを食らえ！』

ガレイはグレイバーストでハカセを妨害する。ハカセは足を巧みに使い、ハリケーンを留める。だが、このままではハリケーンを落とすのは時間の問題だ。

「わあ。ヤバイよ、誰か！」「お任せくださああいー！」

鎧がゴカイスピアでガレイに向かい回転に乗せて切り裂く。ガレイはグレイバーストを剣に変え、それを受けた。だが、鎧は逆側に回転、より強力な一撃をガレイに決めた。

「『うああー！』」

「今です、ドンさん！」

「サンキュー。ルカ！」

キレンジャーになったルカに向かってハカセがパス、ルカは頭でそれを取る。

「ボールを渡せ！」

ダークナイトがハリケーンを奪おうとルカに斬りかかる。ルカは避けるので精一杯だ。

「ちょっと、ずるいわよ！」「黙れ！勝てば官軍よ！」「うおお！」

映司はダークナイトの前に立つ。ダークナイトの剣を弾き、メダガブリューで切り裂く。そしてバインダーを尻尾に変形させ、ダークナイトを吹き飛ばした。

「今です！」「ジョー！」

ルカはヘディングでハリケーンをアオレンジャーになったジョーに飛ばした。ジョーはそれを受けとる。後はジョーが地面にハリケーンをセット。マーベラスがそれを蹴れば、黒十字王は滅びる。勝利は目前だ。だが、それを邪魔するものがいた。

「好きにはません!」

サラマンデスが二又の槍でジョーを襲う。空中のジョーは自由に動けず、まともに食らってしまった。ハリケーンが地面に落ちていく。

「しまった!」

「我らの勝利だ!」

黒十字王は勝利を革新した。ハリケーンさえ破れば自分を倒せる武器は無い。勝利まで後一步だ。

だが、映司がハリケーンをキャッチし、地面にセットした。

「マーベラスさん、グライディングトライです!」 「ああ、決めるぜ、映司!」

マーベラスが走り出す。ジョーがボールを落とした時、マーベラスに不安は無かった。必ず黒十字王に勝てることをマーベラスは確信していた。今、自分がとどめの一撃を決めれば、黒十字王は終わるだ!

黒十字王は目にエネルギーを集中する。最大のピンチだが、同時にマーベラスを倒すチャンスと言える。マーベラスがハリケーンを蹴る直前にビームを撃てば、マーベラスと映司はハリケーンとともに爆発する。そうすれば残ったメンバーなど簡単に片付けることができる。

「死ね、赤き海賊よ、仮面ライダーよ!」

「そうはせん!ブルーチェリー!」

ジョーが青い弓から矢を放つ。黒十字王の体に矢が刺さった。その痛みで黒十字王は狙いを外した。

「し、しまった！」

「エンドボール！」

マーベラスがゴレンジャーハリケーンを蹴り飛ばした。ハリケーンは黒十字王に飛んでいき、変形する。カシオペア座。宇宙に浮かぶ5色の輝きが生み出すカシオペアX線が唯一黒十字王の弱点だった。今、その光が黒十字王を襲った。

「カシオペアが……カシオペアX線が……うああああ！！？」

黒十字王は悶え苦しみながら爆発した。黒十字王が消えたことでライバル軍団も爆発することとなった。

「やりましたね、マーベラスさん！！！」

「ああ！」

マーベラスと映司は手を握りあう。黒十字王は倒れ長い戦いは終わりを告げた。そう思えた。

「まだだ！」

黒十字王は復活、巨大化した。戦いはまだ終わらない。

リバーズ・オブ・ブラッククロス（後書き）

皆さんどうでしたでしょうか。劇場版199ヒーローでゴーカイハリケンカシオペアに黒十字城は倒れたため、こちらでもカシオペアを弱点にしました。

ゴレンジャー達の名前がそのまま黒十字王の弱点になっていたのは驚きでしたよ。

次回はついに大いなる力の出番です。最後まで見てください。ご意見ご感想、お待ちしております。

ちなみに私のフォーゼ第1話の感想は活動報告に書いておきました。

ゴークイオーと決戦とオーズの大いなる力（前書き）

ついに始まった黒十字王との最終決戦。

勝つのはゴークイジャーと仮面ライダーオーズか。それとも黒十字王か。

オーズの大いなる力も登場します。ぜひご覧ください。

ゴーカイオーと決戦とオーズの大いなる力

巨大な黒十字王が出現したことで人々は騒然となった。人々は必死に逃げ回る。病院にいた後藤も避難することになった。

「くそ、この腕さえ治ったら！」

後藤は戦いに参加できない自分が悔しかった。看護婦が避難するよう諭す。後藤はそれに従わざるを得なかった。

「伊達さん、火野、ゴーカイジャー。頼むぞ……」

後藤には仲間を信じ、避難した。

「ハッピーバースデー、黒十字王！素晴らしい！」

鴻上はビルの中でケーキを作っていた。ビルから黒十字王の姿が見えるにも関わらず、のんきに黒十字王を祝っていた。

「誕生は素晴らしいことだ。例え、それで何が生まれたとしても……。だがね、黒十字王。誕生するのが君だけとは限らないよ」

鴻上は何かを待っていた。新たな誕生。それを祝うため、彼は新たなケーキを作る。

「映司君、アंक、ゴーカイジャー。皆生きて帰ってきて」

比奈は避難せずにクスクシエで祈っていた。映司たちは必ず勝利し

て帰ってくるのだ。そう信じる。だから自分は逃げない。この場所に絶対彼らはもどってくるのだから。

「全くどいつもこいつもしぶとすぎるだろ」

マーベラスはモバイレッツを操作し、ゴークイガレオンを呼び出した。

『発進！ゴークイガレオン！』

ゴークイジャーはロープを使い、ガレオンに乗る。

「時空を越えて現れよ！タイムレンジャーの大いなる力！」

鎧はゴークイセラーを操作し、豪獣ドリルを呼び出す。

『発進！豪獣ドリル！』

時空を越えて現れた青いドリル戦車、豪獣ドリルに鎧は乗り込んだ。

『海賊合体！』

ゴークイガレオンの内部は次元圧縮されており、4体のマシンが収納されている。

ガレオンの中からルカのゴークイトレーラー。トレーラーからアイムのゴークイマリノ。マリノからハカセのゴークイフォーミュラー。フォーミュラーからジョーのゴークイジェットが飛び出す。

月面で各マシンは変形合体。ゴーカイジェットが右腕、ゴーカイフ
ォーミユラーが左腕になり、ガレオンに合体。ガレオンの船首が開
き、ロボットの頭が現れる。ゴーカイマリンが右足、ゴーカイトレ
ーラーが左足になり、合体する。最後に頭部にキャプテンハットを
被り、合体が完了した。

『完成！ゴーカイオー！』

「出だよ！アバレンジャーの大いなる力！」

『豪獣神！』

鎧はコックピットの舵、ゴーカイダリンにアバレキラーのキーを差
して回した。豪獣ドリルは恐竜型の豪獣レックスに変形した。レッ
クスの頭と尻尾、両腕が分離。レックスの両腕は背中に装着される。
レックスの頭は腕に変形し、左腕に。レックスの尻尾は右腕に変形
し、ボディにくっつく。最後に胸のカバーから頭が現れ、変形は完
了した。 青い巨人となった。

「完成！豪獣神！」

2体の海賊戦隊のロボットは黒十字王と向かい合う。映司と伊達、
アंकはそれを地上から見上げる。

「でっかい」「こりゃ加勢は無理か？」「俺たちは見てるだけか
……」

3人はゴーカイジャーの勝利を信じるしか無かった。

「スーパー戦隊を信じる愚か者達よ。この海賊どもを始末し、お前

達の希望を打ち砕いてくれる！」

「そうはいきません！」 「地獄に落ちるのはてめえのほうだ！」

「だいたいあんたの弱点はわかってるんだからね」

「ゴレンジャーの大いなる力だ」 「やるぞ」

『レンジャーキー、セット！』

ゴレンジャーのレンジャーキーをゴーカイダリンにセットし、回す。ゴーカイオーの胸からゴレンジャーのマシン、バリブルーンが飛び出す。バリブルーンはゴーカイオーの背中に合体した。

『完成！ゴレンゴーカイオー！』

ゴレンゴーカイオーは空中に飛び、ゴーカイケンを合体、巨大化させる。

『ゴーカイハリケン、カシオペア！』

ゴーカイケンに赤、青、黄、緑、桃色の星が宿る。カシオペアの力を受けたゴーカイケンゴレンゴーカイオーは振り下ろした。

「そうはいかん」

黒十字王の周りに巨大化したダークナイト、サラマンデス、狼鬼、クエスターガレイが現れる。4体は一斉に攻撃し、ゴレンゴーカイオーを撃破する。

「うああー！！」

ゴレンゴーカイオーは地面に墜落した。

「この4人は私の盾だ。こいつらを倒さぬ限り、私にハリケーンを当てることはできない」

「ちっ、面倒なやつだぜ」

4人のライバル軍団はゴレンゴーカイオーに襲いかかる。ダークナイトの剣、狼鬼の三日月剣、サラマンデスの二又の槍がゴレンゴーカイオーを斬る。

「皆さん！」

「てめえの相手は俺たちだ！」

ガレイはグレイバーストを連射し、豪獣神の装甲を傷つけていく。

さらに黒十字王はビームをゴレンゴーカイオーに撃つ。ゴーカイオーからバリブルーが分離し、合体が解除されてしまった。

「ああ、バリブルーが……」

「こいつは本格的に不味いな」

地上の映司達も危機を感じた。ゴーカイオーと豪獣神はどんどんぼろぼろになっていく。だが、まだゴーカイジャーの闘志は消えてない。ゴーカイケンを振り回し、怪人達に反撃する。

「まだまだ負けねえ！」 『レンジャーキー、セット！』
『ガッオ！』

ゴーカイジャーはガオレンジャーのキーを使い、天空島からガオリオンを呼び出す。ガオリオンは口から光線を放ち、敵を蹴散らした。

続いて、シンケンジャーのキーをゴーカイダリンにセットする。

ガオリオンがゴーカイオーと合体。体の各部のハッチが開き、文字が現れる。右腕に天、左腕に土、右足に木、左足に水。そしてガオリオンの口から火。ガオリオンのパーツとゴーカイケンが合体した長刀を取る。最後にシンケンジャーのロボ、シンケンオーの物に似た兜を被ることで完成した。

『完成！シンケンゴーカイオー！』

「まだそんな力があつたか！」

「どきやがれ！」

シンケンゴーカイオーは長刀を振り回し、敵を切り裂く。まず、ゴーカイジャーは狼鬼を片付けることにした。長刀を振るい、狼鬼の体を切り裂く。

「ぐああ！」

「今だ！」『烈火大斬刀！』

シンケンゴーカイオーの右手にシンケンレッドの武器、烈火大斬刀が出現する。シンケンゴーカイオーサイズのため、さらに刃は巨大だ。

『ゴーカイ侍斬り！』

シンケンゴーカイオーが烈火大斬刀を振り下ろす。狼鬼は見事に真っ二つになり、消えさった。

「バカな、俺がー！」

狼鬼は結局、パワーアニマルの力の前に消え去った。かつてと同じように。

「狼鬼を倒すとは……だが!」「好きにはさせぬ!」

ダークナイトは額の宝石のエネルギーを刃に集中。サラマンデスも炎を槍の先に集める。2体は同時に刃を振るい、シンケンゴークアイオーに強烈な一撃を食らわせた。ガオライオンとの合体が解除される。

「ガオライオン!」「ぐおお……」

「ガオライオンさんとの合体も無理です」

「なら、他の力で」

「そうはせん!」

黒十字王とダークナイト、サラマンデスはますます攻撃を激しくする。ゴークアイオーが新たに大いなる力を発動する隙を与えない気だ。

「攻撃激しすぎ!」

「これじゃ大いなる力を使う暇無いよ!」

「鎧、そっちはダメなのか!」

「こいつ、めちやくちや強くて……」

鎧もゴークアイオーを助けたかった。ドリルをシールドモードにして弾を防ぐことでガレイに近づくことには成功した。だが、ガレイはスピード戦法に切り替えた。グレイバーストを二刀流にし、素早い身のこなしで豪獣神を斬る。豪獣神のスピードではガレイの動きに対応できない。

「鈍いんだよ、お前！」

『そのまま仲間が倒れる姿を見物するがいい！』

そのころ、地上にいた映司は伊達とアंकにあることを頼んでいた。

「メダルを分けて欲しい？」「ふざけんな。今日、どれだけメダルを使ったと思ってるんだ」

「それはわかってる。でも頼む。マーベラスさん達を助けたいんだ」

映司はある作戦を立てた。基本的にメダガブリューはセルメダルがあればいくらかでもパワーを高めることができる。だから大量にセルメダルを集めて撃てば、巨大怪人を倒せるのではないか。倒せずとも注意をひくぐらいはできるのではないか。映司はそう考えたのだ。それにはアंकと伊達の協力が必要だった。

「俺は渡さないぞ。やつを倒したところで俺には一文の得にもならないじゃないか」

「おいおいアंक。お前にしては浅はかだな」

「なんだと」

「あいつを倒さなかったらクスクシエが潰されるぞ。そしたらお前、アイス抜きじゃないか。アイス無しで生きていけるのか」

「……20枚だけだ。それ以上はやらん！」

アंकはしぶしぶ映司にセルメダルを渡した。アंकにとってそれほどアイスは大事なのだ。

「俺もやるぜ。あの海賊達がいるから今の俺たちの生活があるんだ。あいつらを死なせるわけにはいかねえ」「ありがとう、アंक、伊達さん」

伊達はメダルタンクからセルメダルを取り、映司に渡した。アंकも手からセルメダルを落とす。映司はメダガブリューにセルメダルを集めた。大量のエネルギーがメダガブリューに充電される。

『プ・ト・ティラノヒツサツ！！』

映司は狙いをつける。狙いはサラマンデスの胸だ。

「食らえー！！！」

メダガブリューから放たれた光が、サラマンデスの胸にある冥王の星を破壊した。冥王の星は竜王子の証同然。自らの誇りである冥王の星を破壊され、サラマンデスはショックを受けた。

「俺の、俺の冥王の星が……おのれえ！」

サラマンデスは二又の槍を振るい、映司達のいる辺りを攻撃する。映司達にはギリギリ当たらずにすんだ。そしてこれでサラマンデスに隙ができた。

「今だ！」『レッツゴー！ゴーカイプロミネンス！』

ゴーカイジャーはゴーゴーフাইブの力を発動。

右手のゴーカイケンで炎の円を描く。そして両手のゴーカイケンでサラマンデスをX字に切り裂いた。これがゴーゴーフাইブの力、ゴーカイプロミネンス！

「ぐああ！俺が、この俺が敗れるなど……ありえぬ！」

サラマンデスはゴーカイプロミネンスによりマイナスエネルギーを焼き尽くされ、消滅した。ついに2人の戦士が倒された黒十字王は焦り始めた。

「この愚か者ども！どこまで私の邪魔をすれば気がすむのだ！」

黒十字王は光線で映司達の周辺を焼き払う。さすがに今度は変身を解除されることになった。

「映司！」「死ね、海賊ども！」

ダークナイトは剣を振るう。ついにゴーカイオーが倒れた。

「くそ！」

「マーベラス、さすがにもう限界だよ！」「このままではゴーカイオーが……」「まだまだ！まだまだ……」

マーベラスはゴーカイオーを立ち上げらせようとする。

「これで止めだ！」

だが、ダークナイトは容赦なく剣を振るう。

「皆さん！」

豪獣神がゴーカイオーの前に立ち、その攻撃を受けた。

「鎧！」

「トライデントモード！」

豪獣神のドリルが開き、槍が現れる。開いたドリルも含め、三ツ又の槍に見立てたトライデントモード。電撃をまとう槍でダークナイトを突く。

「ぬうう！」

「てめえの相手はおれたちだろ！」

ダークナイトは槍を食らい、下がった。そのすぐ後にガレイはグレイバーストで撃つ。豪獣神は大ダメージを受けた。

「くっ……」

映司はその様子を見て己の弱さを悔いた。

「オーズの力を手に入れたのに……俺は……」

「火野……」

「何もできないなんて……」

このままゴーカイオーが壊れるさまを見ていかなければならないのか。映司は己の弱さを悔いた。あの時と同じく自分は無力を嘆くしかないのか、その時、映司はあることに気づいた。

「声が聞こえる……」

「声？」

アंकや伊達も耳をすましてみる。

——頑張れ！ゴーカイジャー！——

町の住民は避難したはずだ。それなのにこんな声が聞こえる。それだけ大勢の大きな声が叫んでいた。

――負けるな！――

――頑張つて！――

――立ち上がれ！――

――勝つてくれ！――

――ゴーカイジャー！――

大勢の人間がゴーカイジャーを応援していた。自分たちを守る戦士たちに激励の言葉を叫んでいた。

「ふん、どいつもこいつも勝手なことだな。結局戦ってるのはあいつらだつてのに」

「違うぜ、アンコ。だから精一杯応援するんだよ。ゴーカイジャーに生きてもらうためにな」

「応援しよう、アンク、伊達さん。きっとそれが今俺たちにできることだ」

伊達はうなずいた。アンクもしぶしぶうなずく。

「頑張れ！ゴーカイジャー！」

その声はゴーカイオーのコックピットにいるマーベラス達の耳にも届いていた。

「へっ、聞こえるか。お前ら」「当然」

「私たちを応援してくださる人たちのためにも……」「負けられないね」

「それがスーパー戦隊。だろ、鎧？」

「そうです。人々の応援を力に変えて戦う、それがスーパー戦隊です！」

人々の声援を受け、ゴーカイオーと豪獣神は立ち上がる。

その時、映司の体が光った。映司だけではない。アंकに伊達も。さらに避難先で応援していた後藤。クスクシエの比奈からも光が放たれる。光はゴーカイオーのコックピットにたどり着き、鍵へと姿を変えた。

「これは、オーズのレンジャーキー！？」

そう。それは仮面ライダーオーズのレンジャーキーだった。

「でもなんで五つも？」

ハカセの言う通り、レンジャーキーは五つもある。全て仮面ライダーオーズのコンボの姿をしている。マーベラスがタジャドル。ジョーがシャウタ。ルカがラトラーター。ハカセがガタキリバ。アームがサゴーゾだ。

「とにかく使ってみるか」

5つのキーをゴーカイドリンに差し込み、回した。

ゴーカイオーの肩にプティラの肩アーマーと腕のアーマーを合わせたような装甲が出現。脚にはティラノの脚の装甲がつく。胸のス

ターバーストはメダガブリューに似た大砲に姿を変えた。そしてオーズのプテラベッドを思わせる兜をゴーカイオーは被った。

「完成！プテティラゴーカイオー！」

オーズの大きいなる力がゴーカイオーに新たな力を送った。全ての悪を無へと返す最強の巨人、プテティラゴーカイオーを完成させたのだ。

「あれが、オーズの大きいなる力……」

「ハッピーバースデー！新しいゴーカイオーの誕生だよ！」

鴻上は祝いの声をあげた。机の上にはゴーカイオーと紫色の字で書かれたケーキがあった。

「ゴーカイジャーを助けたい……そう願う人々と映司君達の欲望が新しい力と呼び覚ましたのだ。素晴らしい！」

鴻上は自分の理屈と無理やりゴーカイジャーのパワーアップをつなげた。だが、案外あてはまっているかもしれない。大きいなる力とはスーパージョウの生き方そのものといってもいい。それはある程度違いはあるが、平和を求め、多くの人々とのかわりの中で磨かれたものだ。だから、他人を助けようとしてきた映司の願いや人々の思いが新たな力を生む。そういうことがあってもおかしくないはずだ。

「なんだこの化け物は！」

ダークナイトはプトティラゴーカイオーに斬りかかる。プトティラゴーカイオーはそれを受けとめ、殴り飛ばした。

「ぐああ！」

「行けるぜ、こいつなら！」

プトティラゴーカイオーは冷気を放った。ガレイとダークナイトの脚が凍りつく。

「動けぬ！」

『ガイ、これは不味いぞ！』『激マズだぜ、レイ！』

「今がチャンスです！」

鎧はドラゴンレンジャー、タイムファイヤー、アバレキラー。3戦士のキーをゴーカイダリンに差していく。

「ゴーカイトリプルドリルドリーム！」

豪獣神の横に豪獣レックス、豪獣ドリルが並ぶ。3体のメカはドリルを敵に向ける。3つのドリルは1つの大型ドリルに変わり、ガレイを貫いた。

「バカな！俺たちが二度も！」

『絶望が私たちのゴールか……』

ガレイは余り関係無いネタを言いながら爆死した。

『ゴーカイカンドロイドアタック！』

ブティラゴーカイオーの各部から巨大なカンドロイドが飛び出した。

「でかい、カンドロイドがでかいよ」

タカ、クジャク、バッタ、タコ、ウナギ、トラ、ゴリラ、プテラ、トリケラ。 9体のカンドロイドがダークナイトに突撃した。足が凍りついたダークナイトにそれを避ける術はなかった。

「この私がこんなところで……」

カンドロイドに貫かれ、ダークナイトは爆死した。

「黒十字王、後はお前だけだ！」

「バカな、なぜまた奇跡が起きた！？」

黒十字王には解せなかった。以前の自身の敗北は奇跡に過ぎない。二度とスーパー戦隊が復活する奇跡は無い。そう思っていた。だが、奇跡はまた起きた。スーパー戦隊が仮面ライダーの力を得るという奇跡が。

「教えてやるぜ。俺たちを応援する人々の意思が奇跡を呼んだのさ！」

「ふざけるな！私は認めぬ！」

黒十字王は認めない。奇跡も自らの敗北も。黒十字王は目から光線を放った。

『ゴーカイレインドウム！』『ゴーカイオーノヒツサツ！』

ブトティラゴーカイオーはメダガブリュー型の大砲から紫のビームを放つ。ビームは黒十字王の光線を破り、黒十字王に命中した。だが、黒十字王は倒れない。

「ぐああ！ま、まだだ！カシオペアで無ければ私は倒れん！」

「じゃあ、カシオペアで行くぜ！」

空中からバリブールンがやってきて5つの星を放つ。ブトティラゴーカイオーは胸の大砲を抜き、斧に変える。それで星を受けとめた。

『ゴックン！ゴーカイオーノヒツサツ！』

「ゴーカイカシオペアレイジ！」

5色の光を放ち、メダガブリューが黒十字王を切り裂いた。黒十字王のいう通り、カシオペアのエネルギーが込められた刃だ。黒十字王の体に爆発が起きる。

「ぬああ！おのれ……おのれ海賊ども！いつの日か蘇りお前たちを」

「幽霊は幽霊らしく、成仏しろ！」

捨て台詞を言う黒十字王にもう一度メダガブリューを振るう。

「ぬああ！」

今度こそ黒十字王は消え去った。ゴーカイジャーと仮面ライダーオーズの勝利だ。

ゴーカイオーと決戦とオーズの大いなる力（後書き）

皆さんどうでしたでしょうか。

伊達さんや後藤さんから出るのはバースの力なのではないかと疑問に思う方もいるでしょう。バースの大いなる力は意見が来なかったこともあり、省かせていただきました。

そのため、伊達さんや後藤さんもオーズの力を出すのに協力してくれました。

実はゴーカイジャーを見ていて黒騎士や姫のシンケンレッドなどから大いなる力をもらえることに若干疑問を持ちました。レジェンド大戦では別働隊に参加していましたが、姫は劇中でシンケンジャーとして活動した時間は少なかったたので。それなら、大いなる力はスパー戦隊が戦いの中で得たもの。その力は戦隊だけでなく、共に戦った戦隊の仲間からも、もらえるものと考えました。比奈ちゃんやアंकからも力が出てきたのはそのためです。会長や知世子さん、里中さんから出てきてもいい気はするのですが……里中さんなんかはいつ映司君の仲間になったのかわかりづらいので。それでは次回最終回。お楽しみにしてください。

後、ゴーカイオーについて書いときます。

プロティラゴーカイオー

オーズの大いなる力、誰かを助けたいという欲望から生まれた力である。

圧倒的なパワーを持ち、冷気で敵を凍結させる。

必殺技は体から巨大なカンドロイドを発進させるゴーカイカンドロイドアタック。胸に装備したメダガブリューから発射する光線、ゴーカイストレインドウム。メダガブリューを抜いて斧にして切り裂くゴーカイグランドレイジ。黒十字王との戦いでは、バリブルーからパワーをもらい、ゴーカイカシオペアレイジを放った。

負けない誓い（前書き）

最終回です。静かに終わります。

負けない誓い

戦いは終わった。黒十字王が消滅した今、ライバルキーが復活することもないだろう。地球に再び平和が戻ったのだ。

人々はゴーカイジャーに感謝した。残念ながら感謝の声にオーズやバースに贈られるものは無い。巨大戦で余り目立たなかったためだ。スーパー戦隊が感謝の声を贈られる中、余りライダーにその声が届けられることは無い。だが、それで仮面ライダーには十分だった。人々の自由と平和を守れたのだから。人々の笑顔で十分彼らは幸せなのだ。それに彼らにも喜びを分かち合う仲間はある。今回はその中にスーパー戦隊も一緒だ。

映司、アंक、比奈、伊達、後藤の5人は勝利の祝いにゴーカイガレオンに招待された。

「すごい、すごいよ、アंक、比奈ちゃん。とにかくすごい船だ」
「そうですね」

映司はゴーカイガレオンの中ではしゃいでいた。ガレオンに入れて嬉しいみたいだ。

「なんで俺までこの船に」「じゃあ来なければ良かったじゃないか」
「なんだと!」

「おいおい、落ち着けよ、アンコ。後藤ちゃんも」

喧嘩を始めそうになったアंकと後藤を伊達がなだめる。しかし、アंकは自分の名前が間違っているのが気に入らなかった。

「アンコじゃないって言ってるんだろ！」

「まあ、落ち着けよ、アンコ」

「アンコじゃねえ！」

マーベラスにまでアンコ呼ばわりされたアंकがマーベラスに言う。

「まあそう怒んなよ。仲間も見てるぜ」

「仲間だと」

「ナビイもお前も鳥だ。仲良くなれるんじゃないか」「ちよつと、鳥じゃないよ。ナビイだよ」

ナビイはオウム型ロボットである。しかし、マーベラス達が相手でも鳥扱いされるのは納得いかない。ナビイはマーベラスに抗議する。

「こんなやつと一緒にするな！」

「こんなやつとはなんだ！」

アंकの言い方に腹の立ったナビイがアंकをつつつく。アंकは右手を怪物化してその攻撃を防御する。

「あの人、ナビイ壊しちゃわないかな」

「大丈夫ですよ、ナビイは頑丈ですし」

ナビイの心配をするハカセにアイムはそう言う。アंकが反撃するが、ナビイは素早く、中々攻撃を当てられなかった。

伊達は机に置いてあった新聞を取る。そこにはゴーカイジャーの顔と賞金が書いてあった。

「あんたら賞金首なのか」

トレーニングしているジョーが肯定の返事をよこす。伊達は賞金の額を見してみる。全員合わせて1260万と五千ザギン。ザギンが日本円に直すとどれくらいかわからないが、きつとすごい額になるだろう。ゴークイジャーを捕まえれば……。だが、良からぬ考えは勘づかれるもの。後藤は伊達から新聞を取り、記事を見る。

「伊達さん……」

冷たい瞳で伊達を見る後藤。

「あたしたちと戦うなら覚悟はできているんでしょうね」

やる気満々なルカ。

伊達は慌てて言った。「変なこと考えてすいませんでした」と。

「うわあ、すごい船ですね」「だろ」

マーベラスと映司、比奈は船について話し合っていた。

「この船ですつと宇宙を旅していたんですか……アカレッドさんと一緒に」

「……そうだ」

この船ですつとアカレッドと旅を続けていた。アカレッドの居場所はわからないが絶対生きているはずだ。マーベラスは今回の事件でますます宇宙最大の宝を手にする気持ちを強くしていた。そして、再会したアカレッドに自慢したいと思っていた。自分と仲間達は

ここまで来たのだということ。

「アカレツドさん、また会えると良いですね」

「ああ。あんたもお兄さん、戻ってくるといいな」

比奈はマーベラスに真実を言っただけでなかったのを思い出した。もう兄が目覚めるのは時間の問題だということ。比奈は思いきって言うてみようかと思った。

「あの、実は……」

「マーベラスさん、マーベラスさん」

鎧がやってきた。なぜかバースのベルトを持っている。

「鎧、なんでお前がそのベルトを」「伊達さんに貸してもらったんです」

鎧はバースが誰でも変身できると聞き、バースのベルトを貸してもらえないか伊達に頼んだ。

伊達はセルメダル一枚ぐらいならいいと思い、鎧にセルメダルとベルトを貸した。

「それではご覧ください。伊狩鎧の華麗なる変身を！」

鎧はセルメダルを弾き、ベルトに入れる。そしてハンドルを回した。

「変身！」

鎧はバースに変身した。

「やったー！やりましたよ、皆さん！ドンさん、ちゃんと撮ってくれましたか」「うん、ちゃんと撮れたよ」

鎧はハカセに変身を撮って欲しいと頼んでいた。それは成功したようだ。

「あの……」「比奈ちゃん」

比奈はマーベラスに兄の真実を伝えようとした。しかし、映司は止めた。

「アंकがお兄さんの体を使わなくなってからいつてもいいんじゃないかな。そのほうがマーベラスさんも喜ぶと思うし」

「そうだね……」

映司の助言もあり、今は秘密にしておいた。今度、マーベラスに会える日まで。

「そつえばマーベラスさん、あのプティラみたいなゴーカイオーが大いなる力だったんですか」

「ああ。だが……」

あの戦いの後、オーズのレンジャーキーは消えてしまった。だからもうオーズの大きいなる力は使えない。

「はっ、それじゃとんだくたびれ儲けじゃないか」

アंकが皮肉を言う。しかし、マーベラスは言った。そうでもない。

「お前らに会えたんだからな」

仮面ライダーオーズ、火野映司。他にも多くの仲間と出会えた。こ
ういった人々との出会いもすべてマーベラスにとっては宝だ。映司
はなんだか恥ずかしかった。

「もし宇宙最大の宝を手に入れた時、まだお前らがメダルを集めき
ってなかったら……俺たちが取りに行くぜ」 「俺たちもそこまで
のんびりしてませんよ」

マーベラスと映司は拳を合わせる。

スーパー戦隊と仮面ライダー。互いの道は重ならないかもしれない。
しかし、別々の道を行っても平和への思いは同じだ。いつか願いの
叶う日が来る。そのために誓おう。決して敗北せぬことを。

戦士達よ。永遠なれ。

負けない誓い（後書き）

読み下りありがとうございました。私の書いた長編では初の最終回です。ちゃんと終われてよかったですよ。仮面ライダーオーズとゴーカイジャーの共演が無かったことから始まったこの話、楽しく書かせていただきました。

少しゴーカイジャー側に話の比重がよってしまったとか気になることもあります。

しかし、一生懸命頑張らせていただきました。

今後の予定はまず『世界の全てを望んだもの』を終わらせることです。すね。

今度新作書くとしたらアニメやゲームとクロスさせた作品が書きたいです。

ところでこの話を書いて思ったことが一つ。

仮面ライダーは戦隊が巨大な敵を相手にしてくれるから。戦隊は仮面ライダーが怪人を倒してくれるから安心して自分たちの戦いに集中できるのではないかと。

別々の道を行っても支えあっているのではないかと。

それは人間も同じです。自分とは別の場所で働いてくれる人がいるからこそ、社会はちゃんと回っているのだと思います。そういった人たちへの敬意を絶やさずに生きていきたいですね。

それでは、これにておしまいです。またどこかで会いましょう。

メダルオーと新たな旅と嘘（前書き）

注意。 はっきりにってこの話は蛇足です。 別に読まなくていいです。

メダルオーと新たな旅と嘘

「ところで鎧。メダルオーってなんだったのさ」

ハカセが気になっていたことを聞いた。マーベラスも思い出した。確かにオーズを見てそんなことを言っていた。

「メダルオーって言うのは都市伝説ですよ。皆さん、オーズって名前を知らないから、勝手につけたんです」

「へえ。そうだったんだ」

映司は今までそんなことを知らなかった。アंकもそんな通り名は聞いたことがなかった。

「じゃあ、仮面ライダーは」

「仮面ライダーは正義の味方の名前ですよ。ジャッカーが戦ったクライムとV3ってライダーが戦ったんです。他にもデイクイドって仮面ライダーがシンケンジャーの敵のアヤカシと戦ったんです」

仮面ライダーは大勢いるようだ。マーベラスはなぜか嫌な予感がしはじめた。

「うわあ!」

気がつくとナビィが落ちてきた。アंकに殴り飛ばされたらしい。

「ど、どうだ」

アंकはかなりの労力を使っただけ。肩で息している。

「風車、風車ぞよ。こんなんでました」

お宝ナビゲートだ。今度は風車に関係のあるものを調べないといけ
ないらしい。

「風車に関係ある戦隊って」

「天雷旋風神の胸が風車みたいですけど、ハリケンジャーは前手に
入れましたからね」

「もしかしたらWじゃないかな。仮面ライダーW」

「仮面ライダーW？」

「そう、仮面ライダーW。風車がいっぱいある風都って町に住ん
でるんだ」

マーベラスはこの言葉を聞いて最悪の可能性に気づいた。

「なあ、映司。仮面ライダーってやつは何人いるんだ」

「そうだな。俺もいれて27……嫌、もっといるよ」「マジかよ」

マーベラスが気づいた可能性、それは全ての仮面ライダーから力を
集めなければならぬ可能性だった。

「おい鳥！占いやり直せ！」「無茶言わないでよ！」「良いからや
り直せ！」

マーベラスはそれからずっとナビィに占いをやり直すように頼んだ。
だが、それは無駄だった。一度出た占いの結果は変わらなかった。

こうしてゴーカイジャーはスーパー戦隊だけでなく、仮面ライダー

の力も集めることになったのだった。

「なんでだー!!」

次々回！

風都にやってきたゴーカイジャー、そこで待っていたのは謎の怪物、ドーパントだった。

「さあ、お前の罪を数えろ」

町を破壊するドーパント。それに立ち向かうのはこの町の守護者、仮面ライダーWと仮面ライダーアクセルだった。

「海賊など信用できるか！」

早速大いなる力をもらおうとするゴーカイジャー。だが、やはりWは大いなる力の存在を知らない。さらにアクセルに変身する照井竜は、ゴーカイジャーを信用していない。

「Wの大いなる力、俺がもらいまゝす」

そこに現れたのはゴーカイジャー達と同じく、大いなる力を狙うバスコであった。バスコはWの師匠だった仮面ライダースカル。Wが倒した仮面ライダーエターナルを召喚して攻撃させる。なぜバスコがライダーのキーを持っているのか。

「全てのライダーの力……俺がもらっ」

そこには暗黒の破壊者、ダークディケイドが関わっていた。

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ」

ダークディケイドを倒すために仮面ライダーディケイドも風都に現れる。

「派手に行くぜ!」

Wとディケイドの力を守るためゴークアイジャールの戦いが始まる。

海賊戦隊ゴーカイジャー 仮面ライダーダブル 仮面ライダーディケイド

暗黒の破壊者

今、新たな奇跡が始まる。

メダルオーと新たな旅と嘘（後書き）

注意 最後の予告らしきものは嘘予告です。本気にした人、すいません。

この話を読んでくださりありがとうございました。ただ終わるだけでは面白くないと思った作者の悪あがきです。

オーズが都市伝説になっけていてもオーズって名前はあまり伝わっていないのではないかと思いましたが。今度のフォーゼでは仮面ライダーが都市伝説のヒーローとして出るそうですが。フォーゼは將軍と21のコアメダルですべての仮面ライダーと友達になると宣言しましたので、歴代ライダーと会う話があつてほしいですね。OPを見ると都市伝説はおまけ要素みたいなものかもしれませんが。それでは今度こそおしまいです。またどこかで会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2845v/>

海賊戦隊ゴーカイジャー 仮面ライダーオーズ リバース・オブ・ブラックク

2011年10月8日23時58分発行